

ドーンデーンケ村雑記

水野浩一

1 再び現地へ

1965年11月1日、予定どおり日本を立ち、バンコクに到着した。しかし、その後準備と旅行のために2カ月費やしたので、ドーンデーンケ村にふたたび足を踏み入れたのは、結局1月4日のことであった。

コーンケーンの町に来てみてまず驚いたことは各種の公共施設が実際に機能しはじめていること、車の数が多くなったこと、商店の移転・改造・新築工事が目だつこと、また飲食店の食器類がきれいになっていることなどである。サラブリからコーラートとコーンケーンを経てノンケカーイに到るハイウェイが昨年開通したのをはじめ、今年もコーンケーンからガーラシンまでのアスファルト舗装工事が完成されたし、その他、ナムポーンダム開設、コーンケーン送電中継所、55キロワット放送局、農業センター、保健・衛生

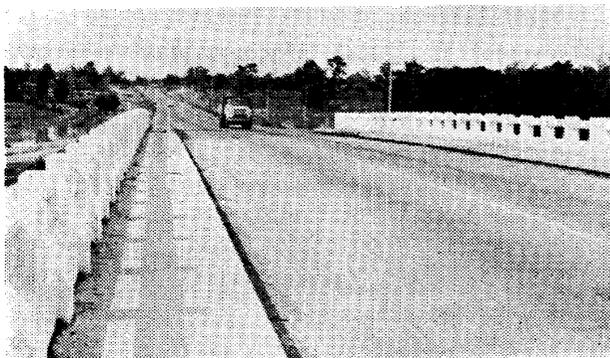


写真1 ハイウェイ、コーンケーンからタープラへの途上

管理センター、診療所員養成学校、コーンケーン大学、技術専門学校などの落成祝賀式があいつぐ。さらに交通網の発達にはガーラシンやマハーサーラカム産の農産物をコーンケーンに運ぶ。「コーンケーンを東北の中心都市に」という構想もまさに実現近しの感をいしている。こうした町の発展ぶりは村人の心にも刻まれ、「ウボンもウドーンもコーンケーンに勝ることなし」と噂される。

1月4日はちょうど月始めにあたるので、郡下の全ガムナン(郡より低い行政区域タムボンの長)と村長が郡役所のホールに集まることになっている。郡側からは郡長をはじめ、副郡長、また米穀課、農業課、畜産課、厚生課、村落開発課の長が出席する。集会の主要目的は役所からの命令・情報をガムナンと村長に伝えることにある。毎年年初めのこの日、ガムナンと村長の職務遂行能力のテストが行なわれる。質問文の例を挙げると、つぎのごとくである。「村の大人はすべて政府発行の身分証明書を所持しなければならないが、現在17才に達した者は申請する必要があるか。」「商いのために牛を5頭以上10頭まで飼育する場合、郡役所に届出、税を収めねばならない。許可なく飼育した者には100バーツ以下の料金が課せられる。正否を問う。」「輸出農産物に該当するものを問う。とうもろこし。ひま。パパイヤ。ケナフ。ジュート。」「土地所有者は税金納入のために調べて報告する義務がある。」

会場にはガムナン・ディーや村長プー・ヤイ・ブッディーの懐しい顔も見える。ただ村落開発作業員の顔ぶれは新しくなっていた。郡下には約30人の開発作業員が派遣されており、それぞれ受持の村を担当することになっている。その受持範囲はだいたい10村、1,000戸位であり、月の半分以上を村人との接触のために費やす。道路拡張、井戸や給水タンクの設置、衛生改善、生活水準の向上、集団討議の指導など開発局の計画を現地で押し進める役割をもつ。作業員は中央出身の者、地方出身の者、また大学出身の者、教員出身の者、ウボンの教育センター出身の者とさまざまであるが、最も重要なことは各人の気持であり、村人との接

触態度である。同じ仕事をし、計画を進めても、マイナスの結果を生じうる。村人は「チャイ・ヤイ」を好み、「チャイ・ノイ」を嫌う。チャイ・ヤイとは「大きな心」を意味するが、具体的にいうと、たとえ地位が高くとも、それを傘に着て人に命令したり、自分の方が優れていると思ったり、人を軽蔑したりせず、なにごとにも寛容で、心が大きく、酒を飲んでも人を罵しらず、なにごとにも分かち合うような人を形容する言葉である。「チャイ・ヤイ」を持つ作業員はつねに成功するし、村人から尊敬されるが、「チャイ・ノイ」を持つ作業員はたとえ開発計画を履行しても、村人から嫌われる。

集会の後、村長プーヤイ・ブッディーと作業員とともにドーンデーン村に向かった。ハイウェイをタープラから東に折れると、道端はケナフを洗浄する農夫で一杯である。夕方、村に着くと、会う人ごとに「いつ来た」「噂には聞いていたが、どうしてんだ」「子供は大きくなったかね」「いつも懐しく思ってた」「写真をみていたが、ものを言わなかった」などという。



写真2 ケナフ洗浄作業、水洗いのため皮をむく村人

なかには、日本へ行った夢をみたが、水ばかりで帰って来たという者もある。どれも待ちかね、再会を歓ぶ言葉ばかりだった。これでも調査には支障なしと一安心だったが「お前のことを思っていたが、お前はどうかだったかね」などと問われるとこちらが恥ずかしくなるくらいである。

昨年世話になった校長の家は作業員が宿をとっているの、今年も町から毎日かように決めた。そして今は県の村落開発課長とともに家を借りてコーンケーンに住んでいる。昨年帰国に際して、友人の家に預

けておいたオートバイもすこし修理すれば使えるし、通訳もまた比較的簡単に昨年の人をみつけることができた。

2 耕作・田植

人類学的な調査にとって1年を通じて現地に滞在できることはまことにありがたい。第1回目の調査の時は水田作業について観察する機会がほとんどなかったし、水田耕作と雨の状態も理解しにくかった。稲作農村である以上、5月、6月、7月はどうしてもみなければならぬ。

さいわい今年は雨が順調に降りはじめた。5月9日から20日までは1日おき位に午後4時半頃から約1時間降る。降り方はそれほど激しくはない。夜も降ることもあるが、朝8時頃にはあがり、あとは曇がちの空模様となる。温度は25~27°C位で快適である。この雨で田に水が溜りはじめ、村の中でも早いところは苗代にもみ種をまきはじめた。田植をした家が1軒あったが、これは例外である。

5月21日から27日までは晴天が少なく、1日のうち雨の降る時間が多くなる。南西風の影響であることはあきらかである。朝起きるとたいてい雨だから、また降りかと落胆させられる。それでも9時、10時頃になると小雨になるから村までオートバイを走らせる。町で降っていないくとも、ラム・チーの橋を渡るあたりはいつも降っているし、村に着くと降っていたり、止んでいたりするから、場所により差がある。1日のうち30分ないし1時間位激しい降りがある。この雨で村のどの家も苗代作りを終えてしまい、田に水が溜るごとに、1枚ずつ第1回目の耕起をする。田の中には新芽の出た草が5~6センチのび、雨水が3~4センチ位たまる。耕せば草は枯れてしまう。ただし、ラム・チー川の氾濫をこうむる田には水草が繁茂しやすく、耕起直後1回だけ除草する。

5月28日から後はしだいに元の天候にもどり、晴天が多くなり、気温も32°C位に上昇する。6月中は15日位雨の日があった。しかし降っても短時間で、外出には困らない。農夫は雨が降ると田に出かけ、晴れるとケナフの除草に余念がない。5月末にまいた種は20日もすると40センチ位に成長するから、6月の中旬を過ぎると、どの農家も田植を始める。道路は雨降りの翌日だとところどころ水溜りができるが、すぐ乾いて

しまう。乾期には乾ききった田のあぜをオートバイで往来できたが、今は不可能である。

水田はノーンとよばれるくぼ地、ないしゆるやかな傾斜をもつ起伏の谷間に発達している。出小屋はちょうど起伏の背と谷の中腹に設けられ、どんなに雨が降っても水の危険がないようになっている。出小屋より高いところには早稲を、近いところには中稲を、低いところには晩稲を植える。苗代は沼池のほとり、もしくは出小屋のすぐ近くに作られる。

雨が降り出すと、田のあぜを修理し、上手を開いて、より高いところに降った雨水が流れこむようにする。耕起は2回行ない、そのあとまぐわで水平に搔きならす。もみ種をまくと、根がつくまで、水をおとす。6日位で根がつき、20日もすると田植ができるほどに成長する。苗は注意深く引抜くが、ともすると根や葉の切れる音がする。一束位になると、足にたたきつけて泥を落とし、束ねて、水でゆすぎ、葉の先端を切って植付けにそなえる。葉先を落すのは植えた時に、葉がたれて水につかるのを防ぐためだという。

苗代と田の耕作は同じ仕方である。まず雨で土がやわらかくなったとき、第1回目の耕起をしておく。まず外側を右廻りで2～3回犁く。ついで長辺を耕すが、端まできたとき、右にまわって反対側の長辺にうつる。その間犁はあそんでいる。中央の線までくれば終りである。第2回目の耕起は田植直前に行なう。その仕方は第1回目とは逆に、中央から始めて、外周を耕して終る。これがすむとすぐ、まぐわで搔きならす。この場合水牛の使い方は第2回目の耕起と同じ順序である。

田植のときは植えながら後退する。用意した苗を1束左手で持ち、右手で3～4本ひきぬいて、根本をそ

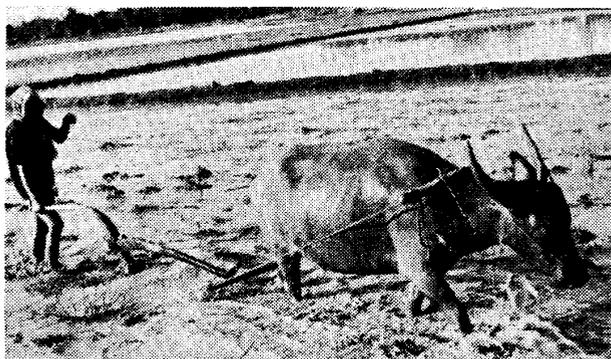


写真3 第2回目の耕起、犁の木部は自家製



写真4 田植、正三角形の頂点に植えられた稲

ろえ、泥の中に押しこむ。深さは親指一杯である。植える人は立ったまま手のとどく範囲内の直線上に5カ所植える。おわると後退して、前列とはたがいちがいになるように植えていく。したがって、植え終ると、片ひじ間隔の正三角形がいくつもでき、その各頂点に苗が並ぶ。

苗は6日位で根がつき成長する。その後、田の除草は行なわない。水の調節としては、適当な水位になるように、水を流すことに努力が向けられる。もし収穫期まで雨が降らないと、枯れてはしまわぬが、成長せず、植えたときとほとんど同じ背丈で穂がつく。これだと4反で石油かんに一杯位しかとれない。それでも刈入れしなければならぬ年がしばしばある。早稲は10月中稲は11月、晩稲は12月頃に収穫する。10月頃は水が一番多くなるから、早稲は出小屋より高いところに植える。

3 天候と生活水準

稲刈で忙しくなるのは12月である。2回の調査期間中、不幸にして一度も刈入らしい刈入風景にぶつからなかった。ここ3、4年間旱ばつと洪水による不作が連続している。町で買う米の値段は昨年100キロ140パーツ位だったのが今年は230パーツもする。ケナフの売上金はほとんど米代にあてなければならない。不足な

らば今まで飼っていた馬、牛、はては水牛を売りはらってやりくりすることもまれではない。不作だとわかれば、あひるを飼い、ゴザを編み、あるいは魚捕に懸命になる。ときには賃金労働にも出なければならぬ。借金もよぎなくされる。

村人が困って金を調達する場合、4種の方法がある。第1は「カーイ・スワン・ポー・キオ」つまり青田売であり、ケナフがある程度成長すると、成熟しないうちに売り払ってしまう。第2は「アウ・グァン・サイ・ポー・キオ」といい、売上金をさきにもらう。収穫が終われば100キロ分のケナフを持ってくるから、前払してくれとたのむ。キロ当りの値段はとうぜん約束した月によってことなる。第3は「アウ・カウサーン・チャムラ・ポー・キオ」といい、第2の方法と類似しているが、金の代りに米で借りる。第4は借金である。100パーツにつき10カ月で50パーツの利子計算になる。村内では10カ月を単位とし、町では1カ月単位である。

どの方法を使用するかは所によりことなり第1、第2の方法を主とする地方もあるが、この村では予想に反して第4の方法がとられている。第1、第2はごくまれであり、第3の方法は全くない。1年の借金額は1軒につき平均して200~400パーツ位で、500パーツ以上、1,000パーツもの金額になるという例をみない。今年村の約50%が金を借りねばならぬ状態になっている。村内の資金は約6,000パーツ位だから、他はター・プラのケナフ商や米屋に依存することになる。

町の商人は利子のためというよりは、むしろケナフ買上げの場を獲得維持する手段として、村人に金を貸付け、村人はいつでも困れば金が借れるから、特定の店にケナフを売る。1週間位で収穫が終わるといような場合は利子なしで、金を貸す。また返還の可能性がなければ貸さぬし、まして借金のために、村人が土地を失うという例は全くない。村人たちが町の商人をどのようにみているかと思い、間接的な質問を試みた。コン・ルエイといえば町の金持を指すが、「コン・ルエイは一般にけちで利己的か、それとも同情のある態度を示すか。」その結果は、「メーター・ガルナー（慈愛・同情）」と答えたもの39人、「けちで利己的だがメーター・ガルナーでもある」と答えたもの8人、「けちで利己的」と答えたもの10人であった。多くの場合、村人の商人に対する態度は反感的でなく、

友好的であることが推測されうる。

村内の資金のうち2,000パーツは村の金であり、他の約4,000パーツは村内の3名のものの金である。1人はトラックの所有者で、田畑の面積は50ライ、他の1人は精米所の所有者で、田畑の面積は15ライ、もう1人は洋裁をし、田畑はなく妻の両親と共にくらす。3人とも金貸業を専門にしているのではなく、比較的金の融通のきく者という性格が強い。他方借金している者の分布をみると、所有反別のどの層にも一様にみいだされる。借金の状態はその家の経済状態を表わしているが、それは単に田畑の所有面積とそれほどはつきりした連関はなく、むしろ他の多くの要因、たとえば家族員数、田畑の質、その他の収入源などとも関連しているらしい。したがってすくなくとも田畑の面積が大であるから経済的に豊かだとは一概にいいきれない状態にある。

田畑の所有面積に差がないわけではない。平均8町、多いものは24町ももつ。しかしその差は、この地特有の不順な天候、灌漑施設のない完全に自然依存型の稲作形態のためにかかなり水平化されるものと考えられる。この点、比較的天候に恵まれ、灌漑施設もとのったところとは土地所有規模のもつ意味がかなり異なるであろう。階層を取扱う場合もこうした特色を十分考慮すべきである。

4 親戚のつながり

調査期間中、村の人とは誰かれの区別なく一様につきあう必要がある。一部の人とのみ接触することはよくない。それでも振返ってみて、一番親しくしたと思う家はあるものだ。今年83才を迎える最年長者ポー・ヤイ・チャン・ナム、60才を超えたポー・ヤイ・ルン、ポー・ヤイ・ハーン、ポー・ヤイ・サン、また50才を大分過ぎたポー・テーン、ポー・プットとポー・トゥン、それから42才のナーイ・ケーン、30才代のナーイ・トンマー、ナーイ・ペンタとナーイ・パンなどの家や出小屋には比較的良好に出かけた。

最初に知り合ったのはポー・ヤイ・ルンである。ポーは父、ヤイは大きいの意味で、尊敬すべき年長者に付す敬称であり、また呼びかけの言葉である。ルンが名前である。姓はマハーチャイというが、日常は名を使う習わしである。田畑の所有面積も多く、馬を飼育するほどだから、経済的にも比較めぐまれている。そ

れと同時に熱心な仏教徒として、また祈祷師として尊敬されている。ポー・ヤイ・ハーンも同じような地位にあり、ポー・ヤイ・ルンの友人であるとともに、お互の妻を通じて親戚関係にあるこの2人が村のナチュラル・リーダーであり、同行してもらえば村人の信用をうることができる。

ついで覚えた人はポー・ヤイ・サン、かつて村長を一年勤めたことのある人で、今は息子夫婦に田畑を耕させ、自分は小さな精米所の番をしている。ポー・ヤイ・ルンは「自分とポー・ヤイ・サンとはパム・クイー」だと教えてくれた。パム・クイーとは妻同志が姉妹関係にある男達間の関係を指す。パム・クイーは若いあいだは田畑作業をともにし、連立って魚をとりに行き、あるいは薪取りに出かけるなど、日常生活をともにすることが多い。お互の仕事ぶりで、また財産分けで争いが無いわけではないが、一般には仲よくみえるし、またそうあるべきことが期待されている。パム・クイーという言葉があるにもかかわらず、それと反対の関係を示す言葉、すなわち夫同志が兄弟関係にある女達の間を指す用語はない。

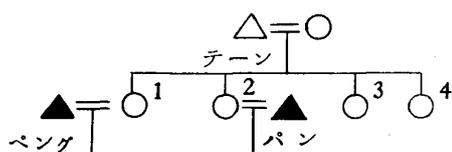


図1 パム・クイー

パム・クイーに気をひかれていたうちに、目についたのが、ナーイ・ペンゲとナーイ・パンである。この2人はその妻、妻の妹2人と合せて6人で、稲刈りをしたあとの水溜でケナフの洗滌をしているところだった。妻の父は沼へ魚釣りに出かけ、母が孫を守って家で留守番をしているという。村ではどんなときでも年令秩序が重視される。ここでも、パム・クイーの兄の方であるナーイ・ペンゲが現場の指揮者であり、作業の段どりを進める。ナーイ・ペンゲにとって妻の妹3人はナーイであり、かれは妹達にとってルンゲの関係にあたる。親族名称においてルンゲはナーイよりも年長者であり、後者は前者に従うべきものとされている。ルンゲは普通父母の兄、ナーイは母の妹と弟を指す。上の

ように同世代においてもルンゲとナーイが使用されるのは、子供からみた関係を使う習わしになっているからである。相互の呼びかけの言葉に注目してみると、ナーイ・ペンゲは妻をナーイ・ブンチャンと呼ぶ。つまりブンチャンという初子の子の母という意味なのだ。妻の妹はナーイと呼び、妻の妹の夫はナーイ・パウと呼びかけている。反対に妻の妹達はナーイ・ペンゲをルンゲもしくはピーイ・アーイと呼びかける。

田から村に帰ってくると、ポー・ヤイ・ルンが「どこへ行って来た」と問う。これは日常使う挨拶がわりの言葉である。そしていろいろと親戚関係のつながりを教えてくれた。ナーイ・ペンゲの妻の母の母とポー・ヤイ・ルンの妻の父とは姉弟の関係にある。そしてナーイ・ペンゲの妻の母の夫がポー・テーンであると説明してくれた。ポー・テーンなら、よく知っている。かれはポー・ヤイ・ルンとともに寺の総代で、いつも村人を先導して戒律を乞う。はじめてこの村に来たとき、村人がスーグ・クワンをしてくれたことがあった。そのとき呪文をと覚えてくれたのはポー・ヤイ・チャン・ナム（チャンは出家中に村人から愛されたことを示す尊称）である。この人の妻の母とポー・ヤイ・ルンの妻の父とは姉弟の関係にあたる。またスーグ・クワンのとき横に坐った娘の父はポー・トゥンといひやはり祈祷師であるが、かれの妻の母の母とポー・ヤイ・ルンの妻の父とは姉弟の関係にある。

調査する場合、各年令層を代表する適当な人をあらかじめ気をつけておく必要がある。ナーイ・ケーンは若いだが、慣習をよく知っており、これから子供達を結婚させようとする年令層を代表する。これに反してナーイ・トンマーはすでに子供があるが、また妻の両親の田畑で働いているから、ナーイ・ケーンより少し下の年令層を代表する。したがって娘婿と妻の両親の関係がよく観察しうるはずである。ナーイ・トンマーの妻の母とポー・ヤイ・ルンの妻とは姉妹であり、ナーイ・ケーンはポー・ヤイ・ハーンの子である。

村では「シップ・フー・ボ・トオ・コーイ、シップ・ルグ・クイー・ボ・トオ・ポー・タウ」という格言がある。ルグ・クイーとは娘婿、ポー・タウとは妻の父である。この格言は、知識のみでは不十分で、経験が大切だと教えるのに妻の父をひきあいに出し、10人の娘婿もこれにはかなわぬと誰もが納得する事実を挙げている。男として生まれればすべて娘婿になる。

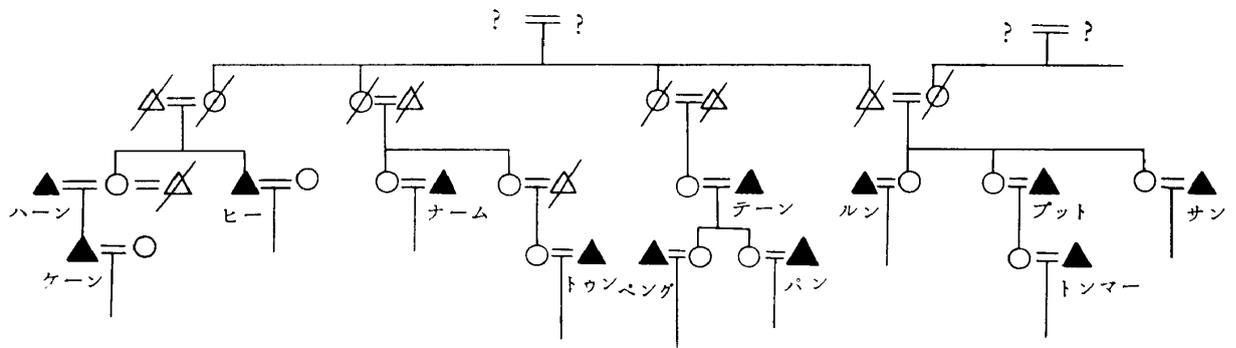


図2 村の男達のつながり

娘を愛するばかりでなく、その父母を、そして水牛や田畑をも愛するにいたる。妻の父母と家のために働き、批難されぬように、どんな仕事にも精を出さなければならない。妻の父との間にはいさかいは少ない。あるとすれば妻の母との間であり、別離の原因の一つでもある。

以上よくつきあったと思う人々をつなぎ合わせてみると図2のようになる。知りあいになった男達はすべて、その妻ないし母を通じてたがいにつながっている。図上の第1世代は父母とともに、もしくは兄弟姉妹とともに、2回にわたって70年前マハーサーラカムより当村に移住してきた人々である。

5 村の子供達

村の子供はごく自然に育ち、どの子も快活である。相手になると笑うし、学校帰りに会うと、立止って礼をしていく。服は破れていたり、ボタンがとれていたりすることがしばしばであるけれども、比較的清潔な感じで、健康的である。

村の南に4年制の小学校があり、4村が通学区域となっている。学童は約230人、各年とも男女1クラスずつ、先生が8人いる。出席率もわりによい。しかし家に帰ると家の手助けで忙しい。水牛の放牧が主な仕事である。一体どういう気持で毎日放牧に出かけるのかと思い、簡単な質問項目を10ばかりプリントして59人に配布した。この点、大人たちより調査しやすい。書いてくれた子には鉛筆を3本やるつもりだった。しかし考えなおして2本にし、残りは全員に配ることにした。「池の蓮は傷つけるな、泥はにごすな」という諺があるごとく、この村では誰もが失望しないように振舞うのが賢明なやりかたとされている。

学校は9時には始まり3時15分に終る。朝食をすませると8時半頃には登校し、授業が始まるまで4～5人ずつ集って遊んでいる。11時に朝の時間が終わると、ほとんどが帰宅して昼食をする。家の人の食事はたいてい午後2時頃であるから、自分で適当に出してきて食べ終わる。放課後、家に帰ると服を着かえる。掃除をする者もある。空腹ならばソム・タム（青いパイヤを千切りにし唐辛と魚醬をませた食物）でも口にして、すぐ手伝いをはじめる。まず男女ともほとんどが水汲みをする（51人）。それから水牛、牛を連れにもどる（50人）。女の子はまた弟や妹の守もする（24人）。遊んだと答えたものは全員のうち4人にすぎない。子供達にとって、家の手伝いは必ずしも楽しい



写真5 ワイ・クルー式のあと、徳をわかつ学童

ものではない。ときには両親に叱られて、しかたなく出かけることもあるが、出かけてしまえば仲間も一緒だし、放牧も楽しい。男の子25人のうち「怠屈だ」と答えた者は1名、「なんとも感じぬ」と答えた者は1名にすぎない。女の子にとって放牧は男の子の場合よりもつらい。「つらい、怠屈だ」と答えたもの20人、「楽しい」と答えたものは14人だった。

男の子にしても、女の子にしても、仲間と一緒にだという意識が仕事を楽しく感ぜしめ、親を助ける態度を形成する上で役立っている。小学校に入ると、一日の生活のうちで、父や母と共にいる時間よりも、仲間と過ごす時間の方が多くなる。そして「友達と一緒にいる時が一番楽しい」と感じるようになり、「父母または祖父母と一緒にいる時が楽しい」と答えた者は59名中わずか3名にすぎない。

子供達が最も尊敬し、またおそれる人は先生と親である。59名中、35人は「先生」と答え、34人は両親と答えている。家庭教育において親が果たす役割は主として農事と家事である。きかぬ子には叱りつけるが、ときには竹の棒でたたくこともあるらしい。59人中54人は「ときどきたたかれる」2人は「しばしば」と答え、「たたかれたことがない」と答えた者は3名にすぎない。

子供達は自分に関連して外で起った事柄を家に帰ってから両親に話しする。その程度は、「必ず」と答えたもの15人、「ときには」と答えた者が44人である。しかし、子供達はその日の出来事を種にして親たちと話し合ったり、また両親と子供たちが団欒する風景はあまりみかけない。子供達は大人が雑談しているのを側でだまって聞いていてもよいが、話にはくわわらない。また親は子供にいろいろと農事について言い聞かせるが、子供が口を開くことは少ない。親には絶対さからうべきでないことが期待され、いやなことでも黙って聞いているか、さもなければ聞き流してしまう。

道徳的な教育にかんしては、家庭で特に教えるということはない。知識として身につけるのは学校においてであり、行動として身につけるのは日常の生活慣習を通じてである。ことにタムブン・タムターン(善根を積む行為)の諸活動を見習うことによって、ごく自然に学びとられるようである。小学生も3,4年となれば、「天国と地獄の存在」を信じるようになり(52

名)、明確な態度をもたぬ者は7名にすぎない。そして59名中、52名は行為の善悪の結果を最も「おそれるもの」の一つとして感じとっている。同時に、社会生活においても、「メーター・ガルナー」すなわち慈愛に満ちた行為を理想的人格の特質とし、「恩を忘れてはならぬ」ことの判断が可能となる。

卒業するときの子供たちの態度は積極的である。すなわち、59人中17人は「できれば進学したい」と答え、39人は「卒業すれば、さらに両親を助けることが出来るから嬉しい」と答え、単に「勉強しなくてもよいから嬉しい」と答えたものは3名にすぎない。しかし、実際に進学しうるものはほとんどなく、多い年で6~7名、ない年の方が多い。親は子供たちが農事の手助けをすることを望まざるをえないからである。卒業後は農事、家事の見習い、そして放牧の生活が長い間つづく。この時代はまた方々の催しに出かけることの出来る楽しい時でもある。20才になって出家の式を終えれば、そろそろ身を固めねばならない。「独身は楽しいが、寂しい。結婚すれば楽しみも増えるが、苦勞しなければならぬ。」とナーイ・ケーンは呟く。

6 爆竹祈願祭

毎年きまって行なわれる年中行事には伝統的な物の考え方や価値観が表現されるから、どこかで催しがあると、なにをおいても出かけなければならない。村の中できめて行なう行事はなにごとにも「そのつど主義」なので、よほどしっかりたしかめておかないと機会を失することになりやすい。

村人に関連のある行事・祭典・祝日を順を追って列挙すればつぎのごとくである。1月1日は新年(公休日);1月8日は子供の日(第2土曜,学校休日);旧3月中(1月22日~2月19日)には村の除穢儀礼祭,ならびに稲魂招来儀礼;旧4月中(2月20日~3月21日)にはチャータカ誕生祭;旧4月上弦の15日(3月6日)は万仏節(公休日),カウ・チー奉獻祭;4月6日はチャークリー記念日(公休日);4月13日は灌水祭(公休日);旧6月中(4月20日~5月19日)には爆竹祈願祭と田の神祭;5月5日は国王即位記念日(公休日);旧6月下弦8日(5月13日)は春耕祭(公休日);6月2日はワイ・クルー(第1木曜);旧7月上弦15日(6月3日)は仏誕節(公休日);旧7月中(5月20日~6月17日)には田植祭;旧第2回目

の8月上弦15日（8月1日）はアシャダ祭（公休日）；翌日（8月2日）は入安居（公休日）；8月12日は王妃誕生日（公休日）；旧9月下弦の1日から10月上弦の15日（9月1日～9月27日）の間には稲魂供養祭；旧10月上弦の15日（9月29日）はカウ・サグ奉獻祭；10月23日はチュラーロンコーン大王祭（公休日）；旧11月上弦の15日（10月29日）は出安居；その後1月間の間にはガチン奉獻祭；旧12月上弦の15日（11月27日）はローイ・ガトンガ祭；その後1月間の間にはパー・パー奉獻祭；12月5日は国王誕生日（公休日）；12月10日は憲法記念日；旧1月（11月28日～12月27日）には刈入祭；旧2月と3月の間には家々の除祓儀礼祭がある。

村では年令を12支で覚えていることが多い。今年は午年にあたるが、その変り目は陰暦6月上弦の第1日、新暦でいえば4月20日であった。旧6月から年が変る。ちょうど乾期が終り、草木が青々としはじめ、稲作の時期を告げる折目である。

ボンゲ・ファイすなわち爆竹祈願祭は旧6月に行なわれる。ボンゲは皇竹 (*Bambusa Tulda*) ファイは火の意味である。7～8メートルもある竹を切り出し、根元に木炭の粉末、樟腦と火薬を混ぜて装填し、空高く打ち上げる。方々の村から集められたボンゲ・ファイは、一つずつ打ち上げ、その手腕を競う。根元すなわち先端には龍の飾がとりつけられる。雨が順調に降り、田畑の作物がよく成長するようにと祈をこめて、村のブ・バーンないしテーワダー(村の守護神)を供養する。したがって一種の雨乞祭ないし農業祭である。

また一説には、この月は仏誕節にあたるために、仏に劫火を奉獻するともいわれる。その場合、ボンゲ・ファイは欲望、憎悪、無知をあらわし、火をつけて煩惱を焼き消してしまうことに意味がある。6月に行なう献納祭であるから、ブン・ドアン・ホッグとも呼ばれる。

前日はワン・ホームといい、村人達は朝から御馳走の準備をする。カウ・プンゲ（米の粉でつくったそうめん）、カウ・トム（糯米をバナナの葉に包み、中にバナナを入れて蒸した菓子）、カウ・モッグ（糯米の粉をねって蒸し、中に椰子の果肉を入れた菓子）、それにラーブ（水牛や牛の肉をミンチにし、唐辛、魚醬を入れて味つけた料理）などがある。他の村から来

た者は、それぞれ知人を求めて空腹を満たし、あるいは休息する。特に形式的な接待はなく、客は来た順にでんでに御馳走になる。このような関係にある間柄をサーマキー・ガンといい、他の村に行くときは必ず、このようなルートを求める習わしである。もし自分のサーマキーがなければ、ある者と一緒に出かける。

午後3時頃になると、各村からボンゲ・ファイが集まってくる。寺の境内からブ・バーンに参り、その後村中をねり歩く。ボンゲ・ファイは肩に担いだり、牛車にのせる。この日は僧侶も別に加わり、住職はそれぞれのボンゲ・ファイを先導する。そのそばを若者達が踊りながら、見物人を楽しませる。道端は人々で一杯になる。夜は境内で映画やモー・ラムがあり、村人にとってはかぎりなく楽しい日である。

翌朝は朝7時頃から寺に出かけ、僧侶に食物を献げて善根を積む。つづいてボンゲ・ファイが広場にもち出され、順次点火する。まず大きな木をえらんで枝を適当にはらい、ボンゲ・ファイを吊し、枝の影から火をつける。首尾よく高く上昇すれば、村人すべてが歓喜の声を発して跳びあがる。そしてフォーン・ラムの拍子をとるケーンの音が一段とたかく響きわたる。ケーンは芦竹を幾本か張合わせてつくった楽器であって、口で吹くが、オルガンに似た音を出す。ケーンはモー・ラムやフォーン・ラムになくはならぬ楽器であり、韻律の美しいものとして村人達に喜ばれている。

ところによってはボンゲ・ファイの日に村の若者達の得度式が行なわれる。村では一人一人だと費用もかさむので、村中の幾軒かの家が寄合って一度に行なうことがしばしばである。この場合、得度式はボンゲ・ファイの前日に行なう。今年は12人の青年が出家し



写真6 フォーン・ラム、楽器はケーンと太鼓

た。そのうち4人はすでに還俗し、8人が寺に残っている。

7 親睦のしるし

帰国の日もしだいに近づいている。やってみたいと思うことはいろいろとある。しかし、またとない機会であるから、時間のあるかぎり、できるだけひろく、そしてつまらぬことでも確実にしておくように心掛けている。

帰りの日が近づくと「いつ帰るのか」「今度はいくのか」「写真をおいといてくれよ、妻や子供のも一緒に」という声が聞こえる。バンコクまで送って行きたいという者、宛名付きの封筒を要求する者などもある。きっと息子の得度式、娘の結婚式に来てくれという知らせを送ってくることだろう。あるいは田植の手間を乞う手紙かもしれない。「マー・ソイ・ガン・ガン・ドゥー」という相互扶助を頼む言葉が、親近感とともに耳の奥から聞こえてくる。

実際に調査をした1年余りの間、村の人はつねに友好的であったし、開けばなしにいろいろと調査に、あるいは雑談に応じてくれた。またその間、物を強請するということもなかった。ときには写真を撮ってくれと要求したり、また菓をいろいろと求めたりすることはあったけれども、それは互によく知り合った間柄であるからで、一度も不快な感じを受けたことはなかった。ただ物をあたえても「ありがとう」などという言葉はほとんど聞かなかつた。はじめは不作法だとも思ったが、これも村という狭い空間で、顔をつきあわせての生活状況では、むしろ親しさを示すもの、「ありがとう」などといわれれば、かえって他人行儀の感じがする。やれば喜ぶし、相手が喜ばばこちらも嬉しい。滞在中に多くのサーマキーがこの村にできた。そのサーマキーの印として、愛用のオートバイは今年から開かれる村の保健所に寄贈することにした。

(6月25日 コーンケンにて)

NASAKOM から AMPERA へ

—インドネシア現地報告—

神 谷 不 二

1

わたくしの調査旅行は2月5日から6月16日まで、約4カ月半。このうち6週間は某財団の好意によって中近東諸国で費したものであり、東南アジア諸国で過した期間は約3カ月であった。この滞在期間は当初の申請予定をだいぶ上廻っている。その理由は、ありていにいって、2, 3の国で外貨の実勢レートによる恩恵をうけたからである。反面、かぎられた予算でなるべく長く現地に滞在するため、節約にも相当留意した。ジャカルタで、ほとんどの外国人が泊るホテル・インドネシアを避けて、そのとなりのウスマ・ワルタ(プレス・ハウス)に泊ったのは、その一例である。後者には前者のようにエア・コンディショナーもなく、調度などもすべて見劣りしたが、住めばけっこう都であった。その証拠に、わたくしがそこへ住むようになってから、各新聞社の特派員たちがつきつぎとホテル・インドネシアからウスマ・ワルタへ引越してきて、わたくしが帰国するころには、ホテル・インドネシアに居をかまえる日本人記者は皆無になってしまった。

旅行中および帰国後に、わたくしはすでいくつかの現地報告を書いた。それらを念のため下に列挙する。いずれもあまりまとまりのないものだが、現地での印象や実感を卒直に伝えようとしたものであることはたしかだからである。

「ベトナムの顔」朝日新聞・大阪版・3月12日

「ベトナム感傷の旅」毎日新聞・大阪版・3月21日

「ネールの幻想」毎日新聞・大阪版・5月16日

「“物情騒然”—ジャカルタの街角で」朝日新聞・大阪版・5月25日

「スカルノ体制のラスト・ページ—インドネ

シア見たままー」共同通信経由、山陽新聞・
7月22日、北国新聞・7月23日その他
「アジアと日本」毎日新聞・大阪版・8月16日
また、これらを総括した上で、旅行中にゆきあたっ
たいくつかの問題点について考察を加えたものとし
て、

「内政の国・外政の国」中央公論・12月号
がある。これも本稿を補う意味でここにあげさせてい
ただく。

さて、今回の調査旅行の主目的はインドネシアにあ
った。この国の政治情勢、ことにスカルノ大統領と共
産党と軍の三者の関係をときほぐしてみたいというの
は、昨年春以来のわたくしの関心事であった。ただ
し、その後1年のあいだに、情勢は大きく変ってい
た。昨秋の「9・30」事件の意味を、わが国では一般
に十分つかみかねていた。事件後事態がだんだん平静
になるにつれて、スカルノ大統領の地位と権限には何
の変化もないという趣旨の見解が次第に強まってい
た。のみならず、大統領と外相スバンドリオが軍を中
心とする反共勢力にたいし巻きかえしを計っている
——こういう情報を頭に入れながらわたくしは日本を
発った。

出発の半月後、2月21日に大統領が内閣改造をおこ
さない、国防調整相ナスチオンを解任したとのニュース
は、「巻きかえし」説を立証するものだと報じられ
た。当時わたくしはヴェトナムにおり、ヴェトナムの
状況を観察するのに忙しく、かつまたインドネシアに
かんするニュースに詳しいものが得られなかったの
で、もどかしい思いに駆られていた。ただ、わたくし
の心の中には、根拠は漠然としたものであったが、こ
のまま巻きかえしが成功することによって事態が安定
するとは思えないという確信めいたものがあつたの
で、つぎの大ニュースを待つこと切なるものがあつ
た。サイゴンからバンコックへ来た直後、バンコック
駐在の日本人記者の幾人かに会って「2・21」以後の
インドネシア情勢にかんする詳報を聞きただしたと
き、そのうちの一人はわたくしの見通しに賛成してく
れた。ただし、彼の意見では、ヤマ場は米の端境期に
なる5月からコネフォ（新興国会議）が予定されてい
る秋にかけてであろうという。

「もしかしたら、わたくしのインドネシア滞在中に

決定的な事件が起きないともかぎらない。」そんなこ
とを考えながら、最初の予定どおりバンコックからひ
とまず東南アジアを離れることにしてボンベイへ飛立
った途端に、「3・11」クーデターが起つたのであ
る。このときもわたくしはインドで、インドネシア関
係のニュースの量が少ないのにイライラし、いっその
こと旅程を変更してすぐジャカルタへ飛ぶことまで考
えた。しかし、インドネシアへいますぐ入国できるも
のやら、それさえもはっきりしないし、旅程を大幅に
かえれば旅費も大幅に増えることになるので、それは
断念した。ただ、「3・11」事件は、わたくしには、
意外な事件というより来るべきものが来たという感じ
だったので、この待望の(!?)ときに現地で際会でき
なかつたのはいかにも残念な気がした。

2

ジャカルタ入りをしたのは、4月30日の夜であつ
た。このとき、わたくしは一つミスをした。シンガポ
ール空港からいよいよジャカルタゆきの日航機に乗ろ
うとしたとき、インドネシアの入国ヴィザの期限が切
れていることを係員に指摘されたのである。その瞬間
まで、わたくしはうかつにもそのことにまったく気づ
いていなかった。インドネシアの入国ヴィザの期限は
3カ月。わたくしの場合は中途に中近東旅行がはさま
れるので、全旅程の最後になるインドネシアへ入る段
になってヴィザが期限切れになることをおそれ、なる
べく出発ぎりぎりにヴィザをもらったのだったが、そ
の有効期限が4月26日、つまりミスを発見された4日
前だったのである。「ヴィザなしではお乗せいたしか
ねます。」そういって係員は、すでに計量して奥へ運
びこんだスーツ・ケースをわたくしに返してきた。

見送りの人も来ているし、手さげの中にはジャカル
タへの土産に用意したシンガポール特製のニギリズシ
まで入っている。まったく進退きわまった。だが、わ
たくしはミスには慣れているので、あきらめる気には
ならなかった。30—40分後にせまった飛行機の出発時
間を気にしながら折衝を続けたあげく、結局、ジャカ
ルタの空港からそのまま強制送還されることになつて
も異存はないという一筆を書くということで、とも
かくも乗せてもらった。その結果は、クマヨラン空港
(ジャカルタ空港の名前)へ出迎えに来てくださった
大使館の方と現地の日航の方とのお力添えで、その

場でとりあえず5日間のヴィザを貰い、2、3日後、これまた大使館のコネクションがあったとはいえ簡単に1カ月間のヴィザを頂戴した。ジャカルタ滞在が延びたとき、6月に入ってからも、わたくしはもう一度ヴィザの延長を認めてもらった。

要するに、わたくしの経験した時点では、まったく無条件とはいえないが、インドネシアのヴィザの問題はそれほど恐れるにおよばなかった。わざわざ旅行者本人の出頭を命じ、面接まで求めた在日領事の真意を解しかねた次第である。もっとも、それはわたくしの入国3カ月前、つまり「3・11」以前のことであったが。

みずからの無知を告白するようなものだが、インドネシアで嬉しかったのは、インドネシア語に四声とか五声とかいうのがなかったことである。英イン辞典でも持っていて、必要な言葉を日本人流にしゃべれば、まあ通じる。タイに通算1カ月近くもいてタイ語でタクシーに乗るのがやっとだったのにくらべて、バハサ・インドネシア（インドネシア語）はよく通じる。それに、心なしかタイ人よりもインドネシア人の方が人なつっこいような気がする——これには異論のある方もあろうが、わたくしの感じは今でもそうである。

ジャカルタの生活で往生したのは、ナイト・ライフの乏しいことである。ホテル・インドネシア界限以外、夜、これといって出かけるところがない。レストランも商店も、露店までが8時か9時にはおしまいである。それと、長期滞在ともなれば食事にもずいぶん苦勞する。われわれが進んでゆく気になるようなレストランに限られているので、大使館員のお宅や商社のメスにもたびたびお世話になった。いま一つ、もっとも大きな問題は「足」である。パブリック・トランスポートーションであるバスは、どの道にも走っているわけでないし、それに第一、文字どおり鈴なりの満員で保安保身をとでも乗りかねる。ジャワ名物のベチャ（人力三輪車）は、近距離の場合には結構愛用したが、遠距離だと乗継がねばならないし、もともとスピードはのろい。こうなれば、なるべくタクシーに乗らない主義のわたくしもタクシー以外にないという気になったのだが、そのタクシーがなかなか思うようには利用できない。つまりは絶対数の不足である。わたくしはある日本商社にたのんで、必要に応じてタクシーを廻してもらっていたが、今後ジャカルタで1カ月上も調査に従事しようという場合には、はじめから月

契約で自動車を1台チャーターした方がいいと思う。しかるべきルートを通じて探せば、かならず見つかる。運転手つきで、実勢レートで計算すれば、かなりきつけれどもまあ何とかやりくりのつく値段である。さもないと、能率が半減どころか何分の一か以下になってしまう。何しろ、誰かを訪ねる場合でも、先方へ行ってそこに滞在しているあいだもずっと車を待たせておいて、またそれに乗って帰ってこなければ帰れなくなってしまうのであるから、よしんば必要のたびごとにタクシーが利用できるとしても、けっこう高いものにつく。

3

インドネシアのインフレーションは、わたくしが経験したかぎりでは、ヴェトナム以上にハイ・スピードであった。この国の公定レートは US \$1=Rp. B. 10 (Rp. B. はルピア・バルーすなわち新ルピア) だが、われわれの目安になるのはホテル・インドネシア・レートである。わたくしがジャカルタへ着いた日には、両レートは一致していた。しかし、その翌日つまり5月1日から、ホテル・インドネシア・レートは US \$1=Rp. B. 25 になった。その1カ月後つまり6月1日からは、それが US \$1=Rp. B. 70 に改訂された。ホテル・インドネシアのグリルやコーヒー・ショップでは、米ドル建ての定価をルピア貨で支払う。たとえばコーヒーは40セントだから、わたくしが到着した日の値段は4ルピア、翌日からは10ルピア、6月からは28ルピア払ったわけである。約40日のあいだにちょうど7倍になった勘定だ。日本の商社のなかには、駐在社員の給料をホテル・インドネシア・レートにあわせてスライド方式で支払うところもあったが、商社の大半、新聞・通信社、大使館、あるいはわれわれのように固定している者には、これはこたえる。ウスマ・ワルタのグリルはインドネシア食だけでちょっとわれわれの口にはあわないので、ホテル・インドネシアと無関係にすどすわけにはゆかないからである。

ジャカルタの商店街パサル・バルーでも、1カ半月近くのあいだにだいたい物の値段があがった。本などもとときどきポイとあがる。

だがしかし、われわれ外国人が体験したようなインフレの波がインドネシアの庶民生活にそのままモロに押しよせていると考えたら、それは誤りであろう。ヴ

ベトナムでも同じことを考えたのであるが、外国人が接する範囲の物価と現地の庶民生活にかかわる物価とのあいだには、あきらかに断層がある。それがなく、たとえば40日間で7倍というようなインフレにたえず襲われていたとしたなら、いまごろスカルノは民衆に殺されていたであろうし、ベトナム人は「20年戦争」に耐えられなかったであろう。ジャカルタでホテルのコーヒーの値段が7倍になったあいだ、米の値段は1キロあたり5,6ルピアでほぼ安定していたのは、まことに印象的であった。(ただし、昨今では6,7ルピアにあがっていると最近きいた。しかし、ホテルの物価高とはいぜんとして比べものにならない。)

では、実勢レートはどうか。わたくし自身は US\$1 = Rp. B. 90から150までを経験した。150というのはごく短期間で、その後今日まで大体100前後で安定気味ということである。国内では共産党狩りと関連して中国人への迫害やイヤガラセが続き、対外的にはマレーシア対決政策が継続していたころ、中国人がドル集めにいそしんだ。その結果ルピアの価値が下り、商店から品物が消えた。米の不足が大きくとりあげられ、日本がタイ国で米を買付けて緊急援助したのも、そのころのことである。その後中国人への迫害的行為がおさまりに、シンガポール承認およびマレーシア対決政策終結の見通しが語られるようになると、中国人は今度はルピアを必要とするようになった。その結果ルピアの価値が元にもどり、かくれていた品物もだんだん店に現われるようになった。緊急援助のものとは思えない米も出廻った。政治・社会情勢が実に敏感に金や物に反映するところは、まさに今日のインドネシアの縮図であろう。

ちなみに、昨年末 Rp. 1000 = Rp. B. 1 の割合で新ルピアへの切換えがおこなわれたとき、紙幣の印刷がまにあわず、いま流通している新ルピア紙幣はもともとイリアン・バラート(西イリアン)用に用意していたものときいた。たしかに、現行紙幣には BANK INDONESIA と書かれてあるが、そういう名前の銀行はいまはない。いまの中央銀行は BANK NEGARA INDONESIA である。そういう次第だから、たとえば何千ルピアという金額を全部25ルピア紙幣で持たされて困ったこともあるし、ジャワ島もバンドン以東へゆけばゆくほど、旧ルピア紙幣が多く流通していた。なお、Rp. B. 1 = 100 SEN であるが、センは庶民の

あいだではまだ意味をもっていたが、異邦人には数すくなく珍しい紙幣というにすぎなかった。

上述の例でもわかるように、インドネシアの経済流通機構を支配しているのは中国人である。これはサイゴンでも、バンコックでも、シンガポールでも接した光景で、異とするに足りないが、問題はインドネシアの中国人差別政策にあるといえよう。タイ人が華僑とうまく同化しつつあるのを目のあたりにしたあとだけに、とくにこの点を感じた。今日、インドネシアにいる中国人約250万のうち約200万はインドネシア国籍を持っている。そのうち、30才以下の青少年層には中国語を読みも話しもできないという中国系インドネシア人さえ相当数いる。しかし、差別政策はこういう人たちにまで及んでいる。一例をあげれば、ナンバー・ワンの大学 UI (インドネシア大学) への入学である。中国系インドネシア人の入学者数は全入学者の5パーセントに押えられ、しかも成績抜群であればかえって不合格になると、むこうで親しくなったある中国系の青年がボヤいていた。成績一番で卒業する者を中国系でなく純粹のインドネシア人にしようという深慮にもとづくものだそう。こういうゆき方が果してこの国百年の大計にプラスになるかどうか、わたくしはたいへん疑問に思った。

4

日本でもいわれたかどうか知らないが、ひところジャカルタでは「ア・ラ・インドネシア」という言葉が一部の人たちのあいだでよく使われた。それは、思いきったことをしそうに見えても妙に妥協的になってしまう、その不可解な妥協性を形容する表現であった。前国防調整相、当時の KOGAM (マレーシア粉砕司令部) 副司令官(総司令官はスカルノ)、現在の MPRS (暫定国民協議会) 議長であり、インドネシア国軍の最長老(といってもまだ50才台の若さであるが)であるナスチオン大将は、当時しきりに、いまや「1945年組」にかわって「1966年組」が「革命」のリーダーシップをとるべきであると演説し、次第に反スカルノ化しつつある KAMI (インドネシア学生行動戦線) や KAPPI (インドネシア中高校生行動戦線) を激励していた。両団体の手になる街々のおびただしい落書きも、カーフェー(わたくしの滞在中前半は午後10時から午前4時まで、後半は午前零時から4時まで)の時

間中に、軍の支援あるいは黙認のもとに学生たちによって一斉に書かれるのだということであった。たしかに、前の晩おそくまできれいだっただ壁に、一夜あければ「MPRSを即時開催せよ」といった類の書きなぐりがデカデカと見られるという情景はしばしばだった。

(スカルノはそのころ MPRS の早期開催に反対していた。)大統領自身が「9・30」事件に一役買っていたのではないか——このことは先般おこなわれたスバンドリオ裁判によって明るみに出かかったようにみえたが、スハルト首相みずからそれを否定する発言をおこなって、沙汰やみになった——ということさえ、識者のあいだでは公然の秘密化しつつあったくらいである。

にもかかわらず、軍は大統領には手をつけたがらず、妥協に妥協を重ねようとする。これは、昨今 KAMI や KAPPI が公然と名ざしでスカルノの裁判を要求するようになって、いぜんとして続いている。まことに不可解な「ア・ラ・インドネシア」だというわけである。マーシャル・グリーンアメリカ大使は、「ア・ラ・インドネシア」というよりもむしろ「ア・ラ・ジャワニーズ」だといっていた。インドネシア風というかジャワ風というか、その点とはもかくとして、この妥協的性格はどこから来るのだろうか。

この国のモンスーンの風土が長年のあいだに国民性を優柔で妥協的なものにしたことは、たしかに争えない。この国の宗教にも、それはいえよう。中東の沙漠に生れた苛烈な一神教は、第二次世界大戦直後に成立したイスラエルをいまだに抹消しようとして団結するほどの執拗な戦闘性を、アラブ諸国にあたえている。しかし、インドネシアの回教には、とてもそんな戦闘性はないのである。

けれども、それは国民性だけの問題ではなさそうだ。もっと政治的なものだろう。東西5000キロ(大まかにいって、リスボンからイスタンブールまでの距離)、大小幾千とも、(無名の小島まで入れれば)幾万ともいわれ、人種・言語・宗教・慣習・風土などあらゆる面できわめて多様かつ広大なこの海洋国家は、国民的統合のためには強力なリーダーシップとシンボルを必要とする。独立以来長年その需要にこたえてきたのは、まさにスカルノであった。ナスチオン、あるいはスハルト以下の現政府首脳に、スカルノに匹敵するほどの力と威信をもつ人はいない。彼らはそれをよく自

覚するからこそ、あえて大統領を温存しようとしている。スカルノ時代を象徴する NASAKOM (民族主義・宗教・共産主義の三位一体) のスローガンはスハルト政府になって AMPERA (臥薪嘗胆) にとってかわられたものの、別の合言葉である REVOLSI (革命) と PANTJASILA (建国五原則=神への信仰・国民的自覚・人道主義・社会正義・人民主権) はいまでも温存されており、将軍から兵卒まで、教授から学生まで、社長から給仕にいたるまでが、ことあるごとにそれらを口にする。

わたくしがいたころは、まだ、もっとも尖鋭な KAMI や KAPPI も名ざしで「スカルノを裁判に」とはいいなかった。それをいうようになったのは、スカルノが過ぎし良き日のこと忘し難く、NASAKOM を NASASOS (共産主義のかわりに社会主義を入れた) といいかえたりして、軍の妥協的態度を見くびって再び巻きかえしを計る姿勢を示したからであろう。軍も学生たちの熱い動きをときに発砲までして押える反面、スカルノを妥協に応じさせるだけの決意は固めている。まさに「二歩前進、一歩後退」のスカルノ「封じこめ」であるといえよう。「3・11」クーデター以降、とくに3月18日のスバンドリオ逮捕以降、スカルノ時代がラスト・ページに入っていることは、この意味で疑問の余地がない。しかし、ジャカルタあるいは西部ジャワはそうであっても、中部・東部へゆくにつれて、大統領にたいする無条件の尊敬が民衆のあいだにいまもって根強いことを忘れてはなるまい。知らないのか、お人好しなのか、ともかくいぜんとして「ブン・カルノ」はわれらの大統領であり、「革命の指導者」なのである。こういう情勢を計算に入れて、学生の過激性を利用しながら一方ではとことんまでスカルノを抱きこんでゆこうとしているインドネシア国軍は、なかなか豊かな政治性をもっているといわねばならない。

5

かつて200万あるいは300万を呼号した PKI (インドネシア共産党) はどこへ行ったであろうか。殺戮された者は40万にも50万にも上るといわれるが、わたくしは20万止りではないかと思っている。(スカルノの言によれば7万8千という。いずれにしても近代史上ベスト5に入る大殺戮であることはたしかである

う。)しかし、1割前後という殺害者の数から、相当強大な部分がまだ地下で再建に備えていると見るのは誤りであろう。わたくしの見たところでは、近い将来PKIがカム・バックすることはできないように思う。アイジット以下首脳部のほとんどが殺され、または逮捕されたことにもよるが、それ以上に急激な瓦解の原因になったと考えられるのは、PKIの体質であろう。その性格上少数精鋭でなければならないはずの共産党が、インドネシアでは——これも「ア・ラ・インドネシア」の現われであるが——いたずらに水まし党員が増えてしまった。他の国の共産党がそうであるように、PKIは苦しい日常闘争・反権力闘争の積みかさねを通じて勢力を増大してきたのではなく、権力の庇護のもとに「プリン・プラン」(機会主義者)を吸収してきたにすぎなかったのである。こういう党に、危機にさいしての強靱な二枚腰は期待できないのではなからうか。

スカルノの時代は終わった。問題は、彼が最盛期につくった言葉—Guided Democracy—がいぜんとして新政府の大きな課題として残されている点であろう。スカルノの「指導民主制」は、結局「指導」だけで「民主」なしに終わってしまった。しかし、およそ国民形成期にある新興国にとって、この両者のバランスはもっとも重要な課題の一つである。対外債務27億ドルという経済的苦境を乗切って近代的発展へのあらたな歩みを踏出すためにも、新政府はこのむずかしい政治的課題を回避することができないであろう。

この点に関連して動向が注目されるのは、いうまでもなく、インドネシア政治の中樞を占めるにいたった閥軍の姿勢である。スカルノ大統領のもとで久しく政治的発言力を削がれてきた彼らは、今後は独立戦争以来の伝統である「国民の軍隊」を旗印にして政治指導にも積極的な態度をとり続ける決意を表明している。彼らは、政党をはじめ一般にシヴィリアンの政治家には大きな不信感をもっている。しかし、アダム・マリク外相、ハマック・ブオノ経済相の存在にみられるように、個々の有能なシヴィリアンを抱えてゆく必要はよくわきまえている。そして、国内建設を看過して空虚な外政主義に走ったナサコム時代を反省して、アンペラ路線は非同盟主義の下における内政中心主義でなければならないとしている。こういう見識がどこまで「実際政治」の上で具体化するか、当分それを見守りたいと思う。(1966年10月7日)

南アジアにおける 乾燥農業と湿潤農業

飯沼二郎

1 ま え が き

今度の私の旅行(1966年4月25日～5月31日)は、西は地中海から東はメコン河まで約10カ国の農村と農業を40日でみてまわろうという、大変乱暴な計画であったので、あらかじめ、調査の範囲を物的、技術的な面に限定した。したがって、この報告も社会的な面には、ほとんど触れることがない。なお、農村調査というものは、日本についてさえ、なかなか容易なものではない。まして、外国ともなれば、なおさらのことである。したがって、今度の旅行では、現地の方々にひじょうにお世話になった。とくに、当センターのバンコック事務所には、ずいぶんご迷惑をおかけした。心から御礼を申し上げる。

2 乾 燥 農 業

こんど行ってきた10カ国の内、西からレバノン、ヨルダン、シリア、イラク、クエート、イラン、西パキスタンおよびインドのニューデリー附近は乾燥地帯、カルカッタ附近とタイ国は湿潤地帯といえる。ここで乾燥地帯といっているのは、農業にとって水が限定要素になっているような地帯、すなわち一部の灌漑地を除き、農作業の主要目的が、土壌水分の保持にあるような地帯である。表1に、私が行った各都市の年平均気温と年降水量を示してみよう。

すなわち、ニューデリー以西とカルカッタ以東とでは、年降水量が画然とちがっていることが明らかになる。まず、乾燥地帯から報告を進める。

A 乾燥天水農業

インド以西の乾燥地帯には、2つの農業形態がみられる。1つは、天水に依存する農業であり、もう1つは、灌漑に依存する農業である。乾燥天水農業(いっばんに dry farming といいならわされているが、よ

表1 南アジアの主要都市における年平均気温と年降水量

都市名	ダカス	バグダード	クエート	テヘラン	ラホール	ニューデリー	カルカッタ	バンコック
年平均気温 °C	17.8	22.7	25.0	16.5	24.3	25.3	26.8	28.0
年降水量 mm	234	156	130	207	492	715	1582	1492

〔備考〕『世界気候誌』第1巻『アジアの気候』1964年より作成。

表2 インドの5ドライ・ファーミング研究所における年降水量

研究所	平均年降水量 inch	同換算 mm	平均年数の	ノーマル以下の降水量		ノーマル以上の降水量		ノーマルに近い降水量	
				年の数	平均	年の数	平均	年の数	平均
Sholapur	27.64	702.0	87年	34年	39%	33年	38%	20年	23%
Bijapur	22.27	565.6	71	23	32	26	37	22	31
Reichur	25.15	638.8	65	25	38	20	31	20	31
Bellary	19.32	480.7	86	35	41	32	37	19	22
Rohtak	20.00	508.0	77	29	38	22	29	16	33

〔備考〕N.V. Kanitkar, *Dry Farming in India*, Delhi, 1944, p. 55. なお, inch から mm への換算は飯沼が行なった。

り正確には dry rainfall farming というべきであろう)は、この地域のいたるところにみかけられる。天水に依存するといっても、天水についていわば「極限状況」において農業をおこなっているわけであるから、年々の降水量の差がきわめて重要な意味をもつ。そこで、ともかく播種をしてみる。あとは、運を天にまかせる。たまたま、その年の降水量が多ければ収穫があるが、もし降水量が乏しければ、収穫は皆無というばあいも少なくない。今度、西パキスタン Lyallpur の Ayub Agricultural Research Institute でおめにかかったドライ・ファーミングの専門家 Mohammad Afzal 博士は、“Dry Farming is a gamble.” といっておられたが、この言葉こそ、まさに、乾燥天水農業の性格を一言にしていいあらわしたものだといえよう。

しかも、この広大な乾燥地域における年々の降水量の差は、きわめて著しい。かつてのインドで(1938~1943年)ドライ・ファーミングの研究を推進した5つの研究所があったが、そこにおける年降水量の変化を、次に示してみる(表2)。(ちなみに、ここに利用した文献は、私の知るかぎり、インド・パキスタンのドライ・ファーミングの研究書として、K.S. Gokhale, *Dry*

Farming in India, Calcutta, 1960. とならぶ最も基本的な文献であるが、残念ながら、日本にないようである。私はニューデリーで随分さがしたが、遂に入手することができなかった。以下は、Afzal 博士のご好意でノートした1部である。)

したがって、ドライ・ファーミングはきわめて不安定な農業であり、年々の収量の隔差はすこぶる大きい。最近(9月5日付)私が受取ったシリヤの農業省に勤めておられるT氏よりの手紙は、この点について非常に興味深いものがあるので、その1節を引用しよう。「麦の方は、今年是不作が予想され、周囲から関心をもたれていただけに、いささか気を使いました。結局、小麦56万トン、大麦20万トンという推計で、関係者の了承を得ました。これは豊作だった昨年、小麦105万トン、大麦69万トンに比べますと、小麦約1/2、大麦1/3以下という訳で、ドライ・ファーミングでは豊凶の差がいかに甚しいものかということを感じました。水田稲作の常識では、到底、考えられないものです。この凶作はシリヤ経済にとって、大変な打撃と思われる。何しろ麦輸出国から輸入国に大幅に転落する訳です。」

では、ドライ・ファーミングは具体的にどのように

しておこなわれているかという点、それには、西パキスタンとインドを境として、2種類の方法がある。私は先に、インド以西を一括して乾燥地帯といったけれども、細かくみると、さらに、それは、パキスタンを境にして冬雨地帯と夏雨地帯に2分される。たとえば、バクダードでは、6～8月の降水量を合計しても2mmに満たないが、いっぽう、ラホールでは同じ期間に年間降水量500mmのほぼ3/4以上降ってしまう。

そこで、冬雨地帯のドライ・ファーミングでは、春播きの作物の栽培は不可能になるので、秋播きの作物（小麦、大麦）のみとなる。春から何回も浅く耕起して毛細管現象を断って、地中の水分の保持につとめ、10～11月頃麦類を播種する。麦は翌年の5～6月頃にならないと収穫されないから、したがって、その年には播種はできず、その翌年、上記のように、春から耕起をくりかえして、秋に播種する（このような作付方式を2圃式という）。このばあい、用いられる犁は、軽くて地中に深く入らず、かつ、土壌を反転しないものでなければならない。写真1は、本年5月上旬、私がダマスカスの北方37kmのセドナイヤに行く途中の高原で写したものであるが、この犁はまさに上記の目的に適合している（ふつう、曲轆犁 Krümmelpflug とよばれる）。

これにたいして、夏雨地帯のドライ・ファーミングでは、もし夏の雨がくるまでのあいだ、水が保たれるならば、春播き作物の栽培が可能である。このためには、その播種前の耕起と、播種後の中耕を必要とする。耕起に用いる犁の条件は、上記の曲轆犁とまったく同様であり、パキスタン・インドでは、いわゆるインド犁が用いられている（写真2,3は、カルカッタ附近のクリシパライ村で、私が5月下旬に写したものであり、もちろん、この地方は表1でもわかるように乾燥地帯ではないが、この犁も、また、この碎土のやり方も、まったくパキスタン・インドのドライ・ファーミングにおけるものと同様である）。また、中耕はくわでなされる。

こうして、夏雨地帯のドライ・ファーミングでは、秋播き作物とともに、春播き作物の栽培もおこなわれる。

このように、同じくドライ・ファーミングについても、夏雨地帯と冬雨地帯とは大きなちがいがあり、農作業においては、中耕の有無という点に、最も端的



写真1 ダマスカス北方37km セドナイヤへの途中の高原

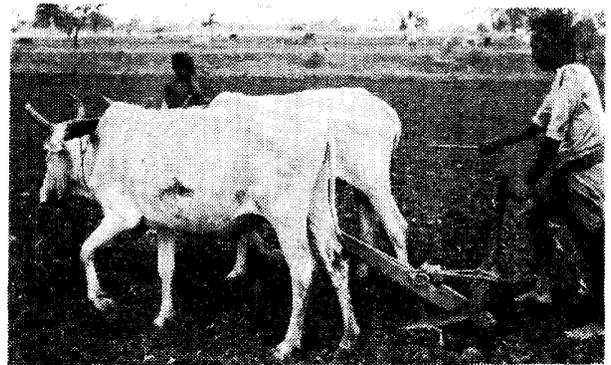


写真2 カルカッタ附近のクリシパライ村

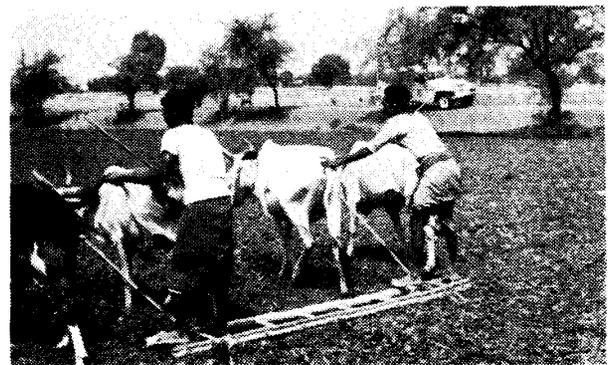


写真3 カルカッタ附近のクリシパライ村

に、それはあらわれている。

B 乾燥灌漑農業

このような不安定な乾燥天水農業を、どうしたら安定させることができるかという私の質問にたいして、Afzal 博士は一言の下に答えられた。「それは灌漑することです。」しかし、このインド以西の広大な乾燥地帯のなかで、灌漑できるのは、ごく一部の限られた地域にすぎない。その方法は、河川からの運河、井

戸、カナート（地方により名称種々）およびこれらの複合型である（河川の氾濫によるものは河川灌漑の変型とみなしえよう）。次に、私がみたかぎりにおいて、以上の灌漑方法について、具体的に説明しよう。

(1) カナート灌漑（ターレババード村・テヘラン南東方 30 km）：この村は、かつて（1961年 3月—1963年 9月）岡崎正孝氏が調査された所で、それによれば（『アジア経済』V, 2）88戸, 398人, 耕地面積 500 ha の典型的なテヘラン近郊農村である。村の集落を囲む土壁のすぐ傍を流れるカナートは、かなりの水量である（写真 4 参照）。500 ha の耕地の内, 200 ha は休閑地, あとの 300 ha における作付割合は、大きい順か



写真 4 テヘラン南方 30 km ターレババード村

らいうと小麦 130 ha, ワタ 80 ha, 大麦 40 ha, やさい 40 ha, 牧草 10 ha である。大麦と小麦は10月末～11月に耕起, 11月末～12月初に播種, 4～5月に灌漑, 6月に収穫。ワタは12～3月に耕起 2回, ついで播種,

5～6月に除草 3回, 6～8月に灌漑, 8～12月に収穫。耕地は 9つの「ボネ」(24時間で灌漑しうる面積)に分れ, 耕起はすべて村内に住むトラクター屋による賃耕, その他の作業はすべて各 6人のボネメンバーの完全な共同（その家族員は参加しない）によっておこなわれている。ただし, 除草も収穫には臨時雇の労働者を入れる。したがって, ボネメンバーの主な仕事は, 労働者の監督を除けば, もっぱら灌漑の管理である。カナートは 2本で, 約 15 km はなれた山麓から引いている。各ボネには, 1日ごとに灌漑される（したがって, このばあい, 1つのボネには, 9日に 1日だけ, 水が来ることになる）。その方法は, 耕地を囲っている約 30 cm の畦畔をシャベルできって, 畦畔の灌漑溝に流れる水を耕地に導き入れる（写真 7 参照）。なお収量は, 小麦は播種量の約 20倍, 1 ha あたり 2.3トン（すなわち 16.3石）, ワタは 1 ha あたり 2.4トンである。

(2) 井戸灌漑（ジャハラ村・クエート西方 33 km）：この村は, クエート湾の最も入りこんだ海岸の近くにあり, 自然の伏流水が地上に湧出する泉によってできたオアシスである。現在では水位が低下してしまったので, 石油発動機で水を汲みあげている。村内には, このような井戸が約 18あり, 井戸 1個につき各 2 ha ほどの農場ができ, 果樹（主にナツメヤシ）とやさいを産している。私のみた農場は, 持主はクエート在住の商人で, 5人の労働者が雇用され, 家族とともに, 農場内の粗末な家に住んでいた。畝 1筆 1/10 ha ぐらいに畦畔で区切られ, 写真 5, 6 のように, くわで畦



写真 5 クエート 33 km ジャハラ村
くわで畦畔をきって灌漑溝から水を導き入れる

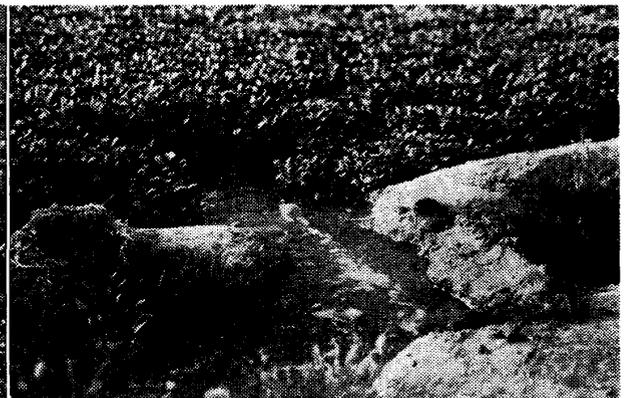


写真 6 畦畔の土をとって灌漑溝をふさいでいるのに注意



写真7 ダマスカス東南方3km ミレハ村
シャベルを用いて畦畔を切る

畔をきって灌漑溝から水を導き入れる（インド以西の乾燥地帯の灌漑は、上述のように、すべて写真7のようなシャベルでなされており、くわは珍らしい。その労働者に聞いてみると、ここでは、4年前からくわが使われ出したのだという。どこから来たのかとたずねてみたが、わからないという答えだった）。灌漑は各耕地とも1日おきとのことである。なお、農場はすべて土壁で囲まれていたが、それは放牧の羊から耕地を守るためだという。事実、羊の放牧は、この附近のいたるところ、クエートの街のなかでさえも、おこなわれていた。

(3) 小規模な河川灌漑（ミレハ村・ダマスカス東南方3km）：インド以西の広大な乾燥地帯に散在する大都市はすべて、河川を利用して造られている。その水は、やがていくつかの灌漑溝をとおって、近郊の耕地をうるおし、砂漠のなかに消えていく。したがって、これらの大都市の近郊には、かならず、灌漑による果樹園、わた畠、やさい畠および麦畠からなる緑地帯が接続している。ダマスカスの近郊にも、このような長さ25km、幅12kmの緑地帯がある。このミレハ村も、その緑地帯のなかにある。私が早朝、訪ねたときに出会った農民の名はオジー、彼はちょうど耕地に水を入れているところであった（写真7参照）。村の耕地面積は60haで、3人の地主がもち（1959～60年の農地改革の結果、1人で18ha以上の土地はもてないはずであるが）、12人が小作している。彼もその小作人のひとりである。小麦は1haあたり60kg播いて800kgとるといふ。播種量の15倍、1haあたり1600kg、約11.5石である。（これは当地のドライ・ファーミングの約3倍に当る）。土地は休閑せず年に

3回転する。すなわち2～5月（まめ）、6～10月（やさい）、11～5,6月（麦）。しかも、その耕地にはくるみ、すもも等の果樹が植えられている。

水は、上記のように、ダマスカスの市街を貫流するバルダ河の支流（灌漑溝）の1つから取入れているが、そこには4つの取入れ口があり、4戸の農家が1週間交替で、水を取り入れている。しかし、このオジー氏のぼあいは、さらに、その1つの取入れ口を2戸で利用しているため、1週間で3日と4日とに分け、彼は4日、したがって4週間に4日だけ、耕地に灌漑する権利をもっている。灌漑の時間は、土質や作物によってちがうが、だいたい1枚の畠で（0.5 acres ぐらい）、1時間ないし1時間半だという。

(4) 大規模な河川灌漑（ローティプール村・ニューデリー西方112km）：イギリスは19世紀末、当時のインドに、河川から大規模な運河を開掘した。それは、人道主義から出たのではなしに、もっぱら飢饉と徴税の対策であった。したがって、運河は採算のあう所にだけ造られ、とくにパンジャブ地方に集中した。いま、パンジャブはインドとパキスタンに2分され、この村はそのインド側にある。私の行った5月中旬には、すでに麦は収穫されおわり、甘蔗がつくられていた。

とくに、ここで注目されるのは、甘蔗畠にくわで中耕がなされていることである。中耕については、先にも、ちょっと触れておいたが、連日40°C以上という5月のインドの文字どおりの炎天下に、人々はみな甘蔗畠の中耕をおこなっていた。みたところ、雑草はほとんどなく、聞いてみると、もっぱら保水のためだということであった。私は、冬雨地帯の灌漑農業では、このような光景に、全然、出会わなかった。ここにも、乾燥天水農業のぼあいと同じく、乾燥灌漑農業における、夏雨地帯と冬雨地帯の差違を、明瞭に認めることができる。

なお、乾燥灌漑農業における犁は、上記のドライ・ファーミングの犁とまったく同様である。このことから、われわれは、乾燥天水農業の影響下に、乾燥灌漑農業の成立したことを推測することができる。

3 湿潤農業

今まで報告してきた地方と全く逆に、タイ国は水の多すぎる農業である。私が今度みることができたのは、

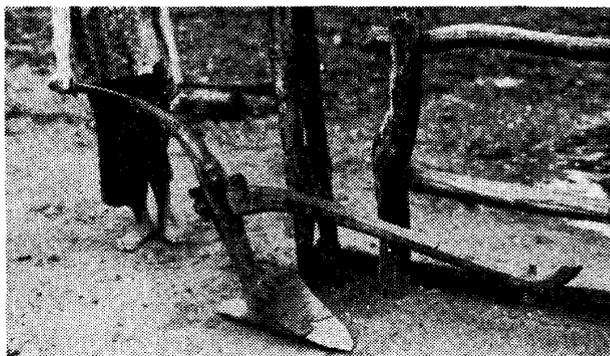


写真8 東部タイのコンケンから約20 km
のドンデン村

中部タイ国と東部タイ国および南部タイ国の1部であるが、5月下旬の、まだ、雨期がはじまったばかりのときであるのに、すでに自動車道路の両側の水田には、畦畔もみえないくらい、水が一杯になっているばあいが多くみられた。タイ国は5月下旬から11月上旬にかけての半年間が雨期であるが、この雨期の到来をまって、犁耕、播種、田植がおこなわれる。犁は写真8のようなものが一般的で、一頭の水牛または牛で引かれる。写真2と比べると、よく分るように、これは明らかにインド犁の系統のものであり、それに中国犁の形態が加味されたものといえよう。

東部タイ国のほぼ中央にあるドンデン村は、当センターの水野浩一君が、すでに2年近くも調査をつづけている村。水野君のご案内で、その村をみる事ができた。人口は130戸、800人ぐらい。つい2週間前までは、田はからからであったという。今5月下旬は大分、田には水がたまっている。そして、1部では犁耕がおこなわれていたが、1部ではすでに田植をおわっていた。灌漑は一切おこなわれない。雨期のはじめには、水をせきとめて、田に水をためるが、やがて雨水が来ると、今度は排水口をあけて排水に努力する。そのうち、10～11月になると、河水が逆流して、水田は冠水の被害を受ける。10月下旬～11月上旬（すなわち雨期の終り）は、水田にいちばん水の多いときで、たいてい、稲の草丈の7分目ぐらいまで水が来る。そして、最低10%は冠水する。そのばあいには、水田に舟でいって、水にもぐって、穂だけを刈りとる。したがって、冠水の被害も少なくない。このドンデン村でも、3年ほど前、雨が多すぎて冠水したため不作になり、1600バーツの年収入の内1200バーツを投じて、村

民の飯米用の米を購入したそうである。

なお、水のためられない高い耕地には、ケナフ（タイ・ジュート）が植わっていた。これは12～4月に播種（2月頃が一番多い由）、11～1月に収穫する。除草は2回おこなう（但し、全然しないばあいもある）。水田では、一般に除草も施肥もおこなわれない。これにたいして、やさい畠は一般に施肥され、また、メコン河の支流の灌漑溝から灌漑される。

以上によって分るように、タイ国の水田では、水のコントロールは、ほとんどおこなわれていないといっている。当センターの石井米雄氏によれば、タイ国の年代記には、雨の多すぎるための不作、また雨の少なすぎるための不作といった記録がすこぶる多いということである。このことは、水の統制がいかに行なわれていないかという何よりの証拠であり、現在といえども基本的に変っていない。雨が多すぎても、逆に少なすぎても（タイ国の水田は、もともと多量の雨水を前提として成立しているから、このばあい、少なすぎるといっても他の水稻地域にくらべたら、決して少なすぎるといわけではない、いわば「豊富ななかの貧困」ともいえるべきものであろう）、まったくお手あげなのである。

しかし、考えてみると、あの広大なタイ国の平野部に、灌排水施設を完備するなどということは、全く莫大な投下資本を要することであり、また山間部についても、今度、私がみてまわったかぎりでは、小さな地域差がはなはだ多く、ここに灌排水施設を完備することも、きわめて困難であるように思われた。その上、稲の品種も、日本種ほど収量は多くないが、根が太く長くて、土壌中の酸素不足にも十分に耐えられるようなインド種であり、深い湛水にも耐えると同時に、深い湛水そのものが雑草の生長を抑制して、除草の煩をばぶいている。もしも、灌排水施設を完備して日本種を入れるならば、タイの水稻生産額は飛躍的に増大するであろうが、それに伴って除草その他の農作業もまた飛躍的に増大することになるであろう。

4 あとがき

今度40日の旅行で私が痛感せしめられたことは、農業の進歩ということは従来とかく考えられてきたように、収量の増大ということばかりでなく、それ以上に、自然に対する統制の増大ということで計られなければならないということであった。インド以西の農村

が、一部の灌漑地を除き、ほとんど自然のままの農業であるように、タイ国の農村もまた、ほとんど自然のままの農業であるように思われる。ただ、同じく自然のままといっても、前者では雨水が乏しいという条件であるのにたいして、後者では逆に雨水が多すぎるといふ条件のちがいはあるが、そのために、どちらも、きわめて不安定な農業である。

このような農業を安定させるために、乾燥地帯においては、上述のように、いろいろの方法で、古くから灌漑施設が発達した。いっぽう、湿潤地帯においては、逆に、排水施設を発達させることによって、その農業を安定させることができるであろう。その典型ともいふべき実例は、現在の日本で認めることができる。(私は、今度の旅行で、日本の農業がいかに安定しており、いかに発達しているかを、改めて反省せしめられた。)しかし、現在のタイ国では、このような排水施設は、まだ、ほとんど発達していない。

このことから考えられることは、水の乏しい自然を統制することの方が、水の多すぎる自然を統制するよりも、はるかに容易だということである。水が多すぎるにせよ、少なすぎるのにせよ、最も幼稚な農業技術にとっては、このような自然の極限状況が最も適合しているが故に、最初の農業は、おそらく、このような自然状況のもとで成立したものであろう。しかるに、水の乏しい自然状況においては、いちやく古代国家が成立したけれども、水の多すぎる自然状況においては、なかなか、そのような古代国家の成立をみる事がなかった。それには、もちろん、いろいろの事情が複合しているであろうけれども、根底的に、上のような事情(自然統制の難易ということ)があるのではないか。

古代国家成立以後の農業の発展過程についても、私は一つの考えをもっているけれども、それはすでに現地通信という本稿の範囲を逸脱することにもなり、また、他の機会にその概略を述べてもおいた¹⁾ので、ここでは省略することにしたい。

(1) 飯沼、「古典時代と旱地農法」『歴史学研究』(1966年1月号)；「世界農業史上における古代旱地農法の位置」『今西錦司博士還暦記念論文集』第3巻『人間』(1966年)

ジャワ島・バリ島の調査旅行から

山口 真一

1

私のこのたびの旅行は、火山性の地すべりの調査というよりは、地すべりを探して歩いたといったほうが当たっているかも知れない。日本において地すべりの多発地帯といえば地質構造線に沿って生ずるいわゆる破碎帯型、火山温泉のそばに生ずる火山性地すべり、裏日本や長崎県の第三紀層型というように地盤の方から素因として分類されている。

ところが東南アジアでは北イタリアからネパールを通過してジャワ島に達するチェシス構造線が走り、日本、台湾を通過して環太平洋構造線がフィリピンに達して居り、それぞれの構造線に沿って活発な火山が並んでいる。日本のように、雪国であって、その融雪水がじつとりと地面をうるおして生ずる裏日本の第三紀層型地すべりはあり得ないにしても、長崎県の北松型三紀層地すべりがあるかも知れないし、ましてや構造的な地すべり、火山温泉性の地すべりは頻発してよいはずであるが、まったくニュースになってあらわれてこない。北イタリアのバイオントダム近傍の大地すべり、ネパールの大地すべりはあるが、東南アジアの地すべりによる大被害はちっとも伝わってこない。東部ジャワのケルード火山爆発による災害も、火口湖の水がまざった土石流型であって、日本の箱根の早雲山地すべり、福島県磐梯山に生じた大地すべりとは趣を異にしているようである。一体この地域の地すべりはどうなっているのだろうか。若しあったらどういう型の地すべりが存在するのであろうか、ないとしたならばなぜであらうか。それらのことを知り得たならばむしろそれが日本の地すべりの真の原因を解明する手がかりとなるかも知れない。そのような点に狙いをつけ、日本ならば起り易いに相違ない火山、温泉にまず目をつけ、そのあたり一帯の調査をして全体調査計画の予備

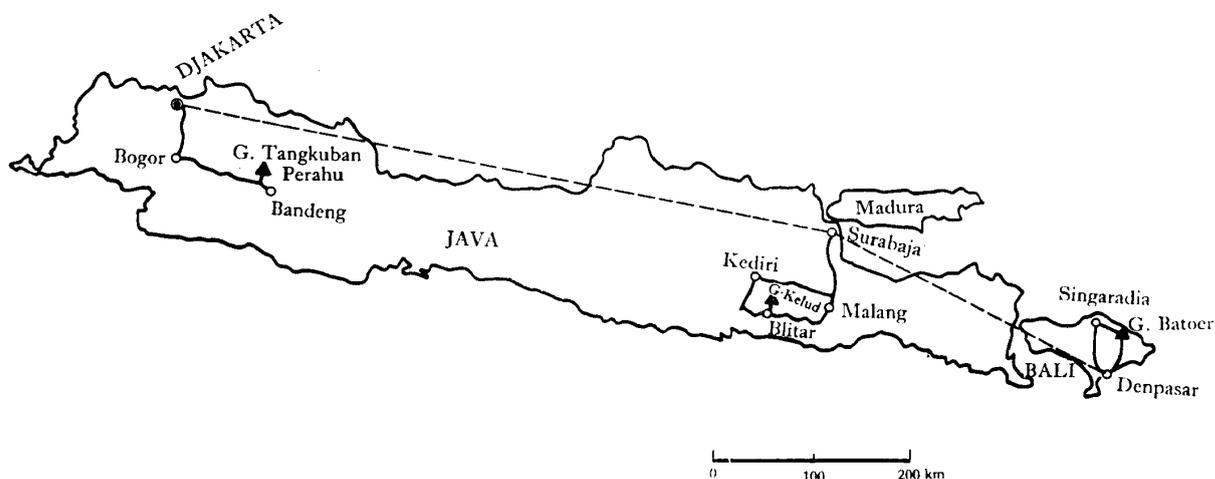


図1 予備調査行程図

調査とした。

インドネシア滞在の期間は1966年7月13日より24日までの僅か12日間であった。全体計画は数年を予定しているので、仕事がすべて終わってからもっと資料を集め整理し、報告した方が良いのかも知れない。けれども現地の事情は非常に流動し、交通公社の案内とは非常な違いを示しているところも少なくないのでとりあえず、小学生の修学旅行の日記のような形でも少しはお役に立つかも知れぬと思ひ筆を取ったわけである。

2

7月13日、今日はいよいよ、インフレに悩み共産党員大量虐殺の後もなまなましいインドネシアに入る日である。未知の世界に飛び込む感激と恐れが胸を締めつける。恐らく人々の気持は荒み殺伐としているに相違ない。それにしても先ず徹底的な検査とか買収とかで、悪名高い税関も通らねばならない。外貨申告書で持ち金全部申告したならば、闇と公定の谷間にはまり込んで一瞬にして貧しい旅人になってしまうかも知れない。ファイトを燃やして冷静に難局を突破するよりほかに手はない。9時30分、バンコック滞在中ずっと宿泊して顔馴染もできたプリンセス・ホテルの勘定をすませ、京大連絡事務所に転がり込む。ガルーダ航空の出発は3時55分であるから時間はたっぷりある。スタミナを作るため、町の見物にも出かけずひっそりと部屋で読書させて頂く。

1時間前に空港につき受付を済ませる。ここでは荷

物の重量ばかりでなく体重まではからさせられたのにはびっくりする。私がふとり過ぎているから特別なだと読者は思われるかも知れないが、どんなスマートな妙齡の女性でも同じく計量されていた。

香港よりの飛行機は到着が一時間遅れた。いろいろな気持ちで同乗するはずの人々を眺め、インドネシアの生活を想像する。冷房の効いた空港で一時間、それもちゃんと遅れの時間を予め知らされて、これでいらするなど全くぜいたく極まりないことが、あとのインドネシア旅行でいやという程思い知らされた。

バンコックは晴、ジャカルタも晴であったはずだが、飛行機は厚い雲の上を飛び、マレー半島も海も何も見えない。ガルーダ航空はシンガポールに寄らないので機中の3時間、あれを思い、これを思い全く長い時間であった。到着予定時間になっても飛行機は暗黒の中を飛んでいる。高度をぐっと下げ Fasten your seat belt はもとより No smoking のサインのついた頃、薄暗いあかりがだだっ広く点々と見えてくる。よみの国に着いたという感じである。節電のためだろうか、空港に夜着いた時のあの目のさめるような素晴らしい夜景はここにはない。空港で型通り免疫、入国管理の窓口を通る。さていよいよ問題の税関である。見渡したところ多くの入国者を恐れさせたことで有名な個室はどこにもない。この国の検査は婦人優先主義で盛んに婦人達が荷物検査を受けている。それが済んでやっと男の番が廻って来たので、荷物を台の上に乗せて旅券を税関吏に渡す。酒を持っているかと聞くから持たないというと、それで OK になりカバンに白墨で印をつけてくれる。確かドルの現金申告があるは

ずだと思いきよきよきよ窓口を探すと、さっきの税関吏が“*This way please*”と出口を案内してくれる。なんとあっけなく国境を越えてしまったことか。これは私が公用旅券だったためか、最近の風潮なのか実は今もって分らない。あまりにも瞬間的に済んでしまった。ほっとしてあたりを見廻すが外貨交換所も案内所もない。出迎え人と車の客引きの人垣をくぐり抜けて進むが、客引きがくっついて離れない。友達が待っているんだと追払おうとするが、肝心の出迎えの人がいないのでどうしようもない。仕方がないのでインドネシアホテルまで3ドルという約束で車に乗る。20年前の古いフォードの運転手は中国人で、良くべらべらしゃべる。良い加減に相づちをうっていると、ドルをルピアに有利に取り換えてやるという。いらなといったが真暗な道をわけのわからぬ方向に進み、人通りのほとんどないところに車を止め、50ドル取り換えるか100ドル取り換えるかと中国人はわめく。この車はドアが2つで助手も横に乗っていて出口は全部ふさがれている。“インドネシアホテルに行け”を繰り返しながら、警官か誰か頼りになりそうな人が通るのを待つ。大きい荷物をかかえているし現地の事情にもまだうとく、旅行者が襲われて一番弱いのはこの時である。無念にも私の財布にはドルの少額紙幣がない。5ドル取り出して身体のきゃしゃな助手の方を突きとばすようにして外に出る。彼等は急に態度を変え、身分証明書の如きものを見せ、必ずホテルインドネシアに連れて行くから乗れという。その間に車の番号39829を手帳に写し取る。こんな所でおろされても方向は分らず車は通らない。大きな荷物をかかえ通行人に道をききながら行こうにも、あまり連中は英語が話せそうでもな

いし、ちょっと見渡したところホテルらしい大きな建物もない。仕方がないからまた乗ると今度はホテルのそばまで確かに連れてきてくれたが、またここで5ドル寄越せと2人でわめく。さっき払ったといっても受取らぬという。車番号が分っているのだから、あとで問題にしても良いと思い5ドル払いインドネシアホテルに入る。あとで聞いてみると空港からホテルまでは1ドルか2ドルの距離だから随分ぼられたものだ。

受付で申込みをしようと思い窓口に向かうと横から“日本の方ですか”と尋ねられる。この人が日本工営K.K.の福岡さんで、やっとここで日本工営さんと連絡を取ることができた。きけばガルーダ航空はいつも遅れるし今回も遅れたので一旦会社に帰り、飛行場へ電話したらもう着いたというので空港にかけつけたら大きい日本人が出迎えを探していたが、車でインドネシアホテルに向かったときき、大急ぎで追っかけたという。彼の方がホテルに先についたので本当に間一髪の差だったようである。ホテル・インドネシアは最低料金でさえ15ドルは取られ馬鹿ばかしいからおよしなさいと奨められ、日本工営さんの宿泊所に行く。所長さんはスラバヤに行き不在だったが、もう1人の日本人千田さんも起きてこられ3人で飲む。随分久し振りに日本人に会ったような気がして話がつきず、眠りに入ったのが午前2時頃であった。さっきの話をすると、警察にうったえると10ドル取り返すのに20ドルかかるから、やめておいた方が宜しかろうということである。この国では中国人は上層階級で、普通は親切で信義に厚くこういうことは滅多にないことだそう。私が余程間が抜けて見えたのかも知れない。

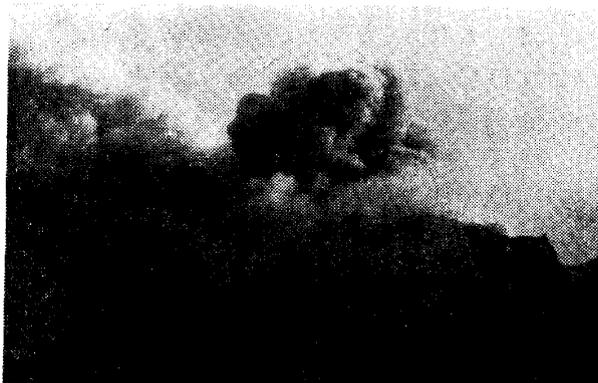


写真1 爆発するケルード火山



写真2 噴煙の中の放電現象

3

14日(晴)眠りについたと思った途端ドアをノックする音で起き上る。7時ジャカルタ発の飛行機でスラバヤに行くべく5時に起こされたのだ。二日酔でもうろうとしたまま空港につく。冷房の設備もない空港に、何の用事があるのか大勢の人が群がっている。例によってガルーダの時間は出鱈目で7時発の予定が9時になる。飛行機は本当に飛び去るまで信用がおけないので最後まで千田さんが見送って下さる。飛行機は軍用輸送機改造のものらしい。パイプの骨組に木綿を張った粗末な椅子である。しかしシュワーデスはなかなか親切で、日本の国内航空同様飲物や菓子パンのサービスをしてくれる。雲の上に火山が点々と列をなして頭を出している風景は非常に特徴的であるが、飛行機よりの撮影は原則として許されていないらしい。

スラバヤに着いたのは11時30分頃であった。むかえの人はまたいない。昨日ついたばかりなのに、朝早い飛行機に乗ったのも、むこうが全部手配してくれていると思えばこそではないか。あまりといえば無礼などいくら怒ろうにも相手はいない。長距離電話はかからない。電報は1週間かかる。そのうち気持ちが落ち着いてくると4時間もかかるカランカテスからむかえに来るので途中何か事故でもあって車が遅れているのかも知れないと善意に考え、日本人のむかえが来たら連絡してくれと空港職員に頼んで食堂で昼飯を、出来る限り

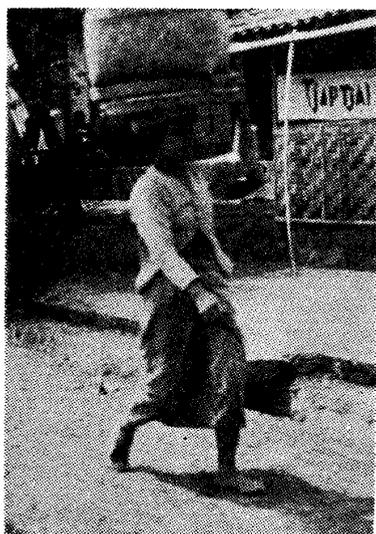


写真3 荷物を運ぶ婦人

時間をかけて食べる。いくら待ってもむかえは来ない。あきらめてカランカテスより頂いた手紙の住所を頼りに車を備う。ここで話が前後するが昨日日本工営さんより3,000ルピアの大金を借金して持参しているので気は大きい。現在の相場で日本円に直すと12,000円前後に過ぎないが、この国の高官の月給が1,800ルピア、中堅官吏が500ルピア程度なので、私が気が大きくなったのは無理もなからう。ジャワ島を縦断して、またそれから山に入って行く長距離コースを500ルピアの約束である。運転手はひげをはやしたインドネシア人で助手はどうもその子供らしい。昨日にこりて運転手に甘い顔はせず、むっつりと腕組みをして渋い顔を続ける。万一のため車の番号をメモし運転手の顔を後から撮影する。荷物を頭の上のせて歩いている女達、お高祖頭布のような回教徒帽をかぶった男達を眺めながら車は良く舗装された道を高速で進む。道路両側の並木に白ペンキを塗って境界杭の代用をさせているばかりでなく電柱のかわりまでさせている。2時間以上経ってマランの町につく。運転手はあっちこち曲った末、駅前の車のたむろしているところへ車をつける。例によってわっと人だかりができる。何かを中の1人としゃべったと思うと、300ルピア俺に寄越して車を降りろ、あとの200ルピアでこの車がカランカテスまで送るといふ。荷物を移して車を乗り換える。多勢の人垣に囲まれているので物騒ではようがない。中にはチップチップと手を出すけしからん奴もある。知らん顔して地図を読んでいるとやっと車が動き出す。ここから道が悪くなり猛烈にゆれる。山の中に入るので不安はますますつよつよ随分時間がかかったように思われたが約2時間でカランカテスに到達して、ほっとしたのは4時30分過ぎであった。あとで聞いてみると、むかえの人は11時頃まで空港で待たれたが、もうジャカルタよりの本日の飛行機はないといわれて帰って来たとのこと。全く憎らしいのはガルーダ航空である。

さっそく歓迎会を開いて下さり小紫所長以下10名程の日本人が日本製カンビール、サントリーなどで夜のふけるまで、和気あいあいと談笑し、我々が今、インドネシアの山中にいることをすっかり忘れる程であった。しかもここは全く涼しい。海拔700mというが空気は乾いているし、7月14日の日本の暑さなどはみじんも感じられない。



写真4 ケルード火山調査隊一行



写真5 ケルード火山頂上附近

4

15日(晴)今日はケルード火山周囲一帯を調査する計画である。畑所長代理と田中地質技師が同行して下さり一番慎重なインドネシア人に6人乗りのワゴンを運転させる。北上しマランより西に進路を取り、途中温泉調査、放射能測定を行ないつつ昼頃カリ・コントに到着。小紫所長は昨夜のうちにこちらに帰って居られ、4月30日のケルード火山爆発の様子やその後の泥流の発生の様子をつぶさに写真を基に話して下さい。噴煙の中の放射現象など貴重な記録写真を頂く。昼食後社宅で美人の奥様にコーヒーを御馳走になる。こちらに来ると本当に日本女性・中国女性は白人といっても差し支えない位色が白く感じられる。この国でも中国人女性はほとんど現地人と結婚せず、仮に結婚すると中国人の社会からは仲間はずれにされてしまうという。こんなところにも、9・30の暴動の際共産党員とともに中国人が多数殺された遠因があったのであろうか。午後カリコントを出発した直後、交通事故の現場を通る。黒山のような人ばかりで前進は不可能。子供がはねとばされて重傷だそうだが、医療設備のない当地では絶望だろう。被害者の家であろうか、家の内からはいつまでも女の泣き声が続いている。自動小銃を持った軍人がいっぱいうろろしているのが不気味だ。アメリカ人が一度事故を起し被害者を助けようとしたら、群集に袋叩きに会ったそうである。日本人がやはり交通事故を起したときは、一目散に逃げて最寄りの警察に届けたそうである。その後始末は随分安い金額で示談にできたという話だ。とも角現地人は非常に安い値段で備えるので、どんな腕自慢達も現地人運転手にまかせているようである。そういう訳で現地人

の中では運転手は金持ち階級に属するので、回教徒の戒律通り4人妻を持っているということである。

タイ国では道路に犬が寝そべって邪魔で仕方がなかったが、この国ではにわとりが道路にうろろうして全く邪魔になる。アスファルトをよくつゞいているがアスファルトがうまいのだろうか。たまには水牛なども道路の真中であぐらをかいている。山の中では猿の一行にも出会った。

5

16日(晴)ケルード火山噴火跡の調査に出発。午後になるとケルードは雲に覆われ視界がきかなくなるので昼までに登頂しようということで、眠い目をこすりつつ5時起床、朝飯、5時30分出発。一行は畑所長代理、田中地質技師の他にカリコントから管野土木技師ともう1人の日本人に、ポーターのインドネシア人、それに運転手2人で2台の車に分乗する。一番楽な登り口はカリコントの反対側にあるのでケルードをぐるっと大きく車で廻る。1500m位の高さまで車で行くことができたがそこから上は歩いて行くより仕方がない。途中放射性測定を続けながら登はん。火山灰の被害、泥流の被害をみながら次第次第に頂上に近づく。爆発したばかりの火山の登山は非常に疲れる。火山灰、砂に厚く覆われた道らしくもない道を一步、一步あえぐようにして昇る。9時30分頃頂上まで1kmの地点に達したが、砂斜面の傾斜は急で、そこから下は断崖のようになっている。ここを横断するのは年寄りにはとても危険である。放射能測定、写真機をたくましい山男達に託してポーターと私とは、弁当とカンピールの番をする。危険な登山なので心配していると12時頃皆元気に帰ってくる。昼食後車を待たせた所まで

戻ると運転手達がハリマオの足跡があると騒いでいた。

カリコントに立ち寄りビールを頂き小紫所長御夫妻、管野氏他の皆様に別れを告げ、畑、田中氏とカラシカテスにむかう。途中マランで夕飯どきになり、中華料理屋による。ここは人口30万位のマラン市最高の店とはいえ個室風の部屋4～5、食卓5位おいた大部屋からなっている木造ペンキ塗りの祖末な店で、繁栄を続ける日本から来た我々にはあまりにもみすぼらしく感ぜられる。蛙の足、鳩など珍しいものから、豊富なカニ、エビの美味しい料理がふんだんにでる。残留したカラシカテスの日本人の人達が、丁度隣の個室に食事をしに来ていたのでビール、サントリーを交換して再び歓迎会気分を味わう。靴みがき、ギター引きが入れかわり立ちかわりやってくる。インドネシア人のギターに合わせて歌う哀調を帯びたテノールをききながら、靴を磨かせ、ビールの杯を傾け大いに大名気分を味わう。しかしここは回教国のせいか料理運び、ギター弾き、靴磨きなんでも男である。参考のためにしるすと靴磨き5ルピア、歌うたいは10ルピア程度である。こんな僅かの収入で良く生きていけるかと思うが、現地人の食事は米飯をカレーでまぶしたものとか、日本のせんべいの醤油のつかないみたいなものであり、バナナなどはふんだんにあるので生きていくのには低収入でもことかかないらしい。この国で生産されているものでもビールは一応飲めるが、ウイスキーはくさくてとても飲めたものではないという話である。

6

17日(晴)朝10時我々がバリ島で使うための車が西方氏を乗せて出発する。彼等は今晚バリ島対岸のブンジュワングに泊り、早朝のフェリーに乗ってギリマヌクに渡り海岸べりを通して我々の飛行機の到着前にデンパサールの空港についてくれるはずである。長距離の旅のつつがなきことを祈る。私と畑所長代理はずっと遅れて午後3時出発し5時30分スラバヤの日本工営宿舍に到着。久保田所長に御目にかかる。夕飯に早いのでサントリーをちびちびやりながら時間を待ち、8時頃町の中へ中華料理を食べに行く。町はやはり暗いがこの店は冷房装置がついているので久しぶりに文化的気分を味わう。冷蔵庫もあるので、持参のサントリー

でハイボールを作って歓談する。それから車を駆って市民公園に行く。ここは市民娯楽街というところであろうか。僅かな入場料を払うと中には芝居小屋、映画館、土産物屋、演芸館などがある。そこに入るときにはまた入場料がいる。岡本綺堂の銭形平次に出てくる江戸時代の茶店のような感じのものが沢山あり、そこには若い女性がいて明るい電灯の下でサービスしてくれる。町の暗いのにくらべ、市民公園全体が比較的明るいのでいかにも健全な感じを受ける。あちこち、うろちょろして可愛らしそうな女性のいるところに入る。インドネシア語と英語とチャンポンに使って彼女と喋りながら、例によって靴を少年に磨かせながら、ビールを飲む。

風も涼しく乾いていて全く良い気分になる。案内の方々も段々ハッスルして来てこれからバーに行こうということになる。バーというのは国が新設を認めないとかでスラバヤにもほとんどなくなったということである。我々の行った所は日本の場末のバーのような感じで白人と中国人がカウンターで一組飲んでいて。一応電蓄もあって、良く聞くアメリカのジャズをかけている。この女性は中国人その他の混血ばかりで全くたくましそうである。盛んに日本人の誰それさんを知っているかを連発する。旅の恥はかき捨てと一夜を共にした人達の名前であろう。彼女達はホテルはおろかどこへでも御供をしてくれるし、ドアの蔭には急ぎの場合のベッドもあるということである。我々は紳士である間に急ぎここを退去することにする。

7

18日 9時25分スラバヤ空港発10時35分デンパサー空港着予定のガルーダ746便がまた例によって遅れてくる。しかし今日は珍らしく1時間の遅れでデンパサーには11時30分頃着き先行した西方氏と再会した。この飛行機は本当の旅客機で機内でサービスしてくれた。もち米の中に肉の入った菓子、チマキのようにバナナの葉に包んだゼリーは最高に美味であった。

さっそく車にのり30分程でデンパサーの町の中心にあるバリホテルに達する。ホテルはそんなに混んでおらず予約なしでOKである。一階建ではあるがなかなかしょうやかな建物である。各個室は網でかごのようにかこまれたベッドルームの他にもう一部屋とバスが付き外にはロビーまであって机と椅子とソファがつ

らている。これでドルに換算すると1～2ドルの料金なのだから大変安い。但しホットのボタンを押しても湯は出ない。水ばかりである。各人が個室を占領して昼寝する。夜はデンパサーから50km程離れた部落へガイドを備ってケチャックを見に行く。この芝居には我々の憎しみのまとであるガルダも登場し神鳥ぶりを発揮しラマを助けて大活躍する。

8

19日(晴)8時にバリホテルを出発し、図1のごとき経路で自然放射能の測定を行ないながら進む。バトール火山の近所に温泉のあることも分ったが、道が悪く徒歩でしか行けない。往復2時間はかかりそうなのであきらめる。バリの山の中は涼しく快適で測定は順調にはかどる。昼近くキンタマニーを通過。ここは市場でもあろうか、人が大勢むれている。この前来た日本人は何となく危険を感じてここで引き返したという。それではこれから先の道は9・30事件以後日本人にとって処女地かも知れない。張り切って先を急ぐが2,000m級の高台から海岸まで一気におりるので道は蛇のようにうねってなかなか北海岸に達しない。気温はどんどん上ってくる。

昼飯のためシンガラジャで中華料理屋を探す。物凄く汚い店ではえが多く、日本では料理店とはお世辞にもいえないであろうが、ここでは最高の店である。汚い店ほど中華料理は旨いというけれど、確かに味は素晴らしい。昨年9・30事件の際ジャワ島から逃げ込んだ共産党員がバリ島で何万と虐殺され(一説には8万といわれる)、特にこのあたりがひどかったといわれるだけに通りすがりの人間が我々をのぞき込むとあまり良い気持はしない。小遣いを渡された運転手がどこかの屋台で昼食を済ませて帰って来たのでさっそく出発する。途中木につながれた馬が道路の反対側に移動したので綱を通せんぼをしたようなかっこうになっている。運転手はおかまいなしにつっ走るので綱はきれ、馬は放たれてしまった。飼い主が気がついてダンピラでも持っておっかけて来そうな気がして、車を降りて放射能の測定をするたびにはらはら道路の背後を振り返る。後進国のしかもこんな田舎でも道はそんなに悪くない。オランダ統治時代の遺物であろうか1km置きに道標があるので観測には至極都合良い。午後4時

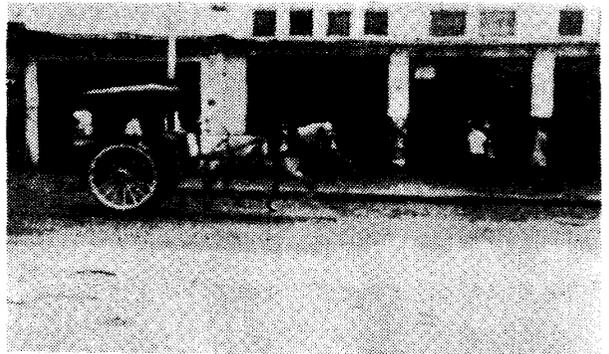


写真6 デンパサーの町を走る馬車

頃ルクルクにつきデンパサーまで10kmの地点に達する。ここからまた温泉探しに西北の方向に進路を逆に取り。この国では温泉のことをアイルパナス(Aires Panas)という。Airesは水、Panasは温かいという意味である。これが普通名詞ではなく固有名詞として使われる。ケルードのふもとの温泉もアイルパナスであるし、ここもアイルパナスである。大体温泉は町の中心にはないし、しかもこちらでは温泉は日本のように珍重されないので探すのに骨が折れる。

この温泉は管から温湯が出て、その下に人間が行ってお湯をあびるというあっさりしたものである。ケルードのふもとは一応バンガローの如きホテルもあり、中をいくつにもしきって家族風呂風になっている別棟ももっていた。

ホテルに帰り一風呂あびてからデンパサーの夜の探訪をする。馬車に乗って暗い町の中を回遊する。馬車の客室は狭いののに3人乗って窮屈なばかりでなく、私の重味で客室が後に傾き馬の下半身が浮くような形になり、苦しそうであるので一時間の約束ではあったが30分程で降りる。どことも同じ様にホテルの廻りにはポン引きが多い。

9

20日(晴)一路南下しサヌールの海岸に行き印度洋を眺める。ここに大成建設がやはり賠償工事で立派なホテルを建設中でほとんどでき上っている。工事現場の中に入って見学するが、インドネシア人達はのんびりとさぼっているように見える。日本人のように勤勉にやったら、熱帯性気候や栄養の少ない食物では身体がもたないのかも知れない。カランカテスの工事現場でも7時から午後2時迄の勤務だそうだが現地人は何

のかの理由をつけては良く休むそうである。娯楽の設備も何もないのに休んで何をやるのだろうか。それに引き換え日本人は勤勉で午後2時に終わってからの時間をもてあまし、遂に9ホールの立派なゴルフ場を作り猛練習をしているという話である。私の聞いた範囲ではジャカルタ、ボゴールにも立派なゴルフ場があり、入会金、キャディ料など日本の値段にするとべら棒に安いので日本人には大いに楽しまれているようである。

10

21日(晴)デンパサー空港を12時30分に発ち16時30分ジャカルタ空港へ着く予定。同行下さった畑、西方面氏は西海岸ギリマヌク発の最後のフェリーボートに乗って車とともにジャワ島に渡る積りなので11時30分にガラソとしたデンパサー空港で別れる。またここで一人旅となるが例によってガルダ685便はやって来ない。インドネシアの空港にはお客へのサービス精神は全くない。飛行機が定刻にやって来なくても何の挨拶もない。冷房の設備もない、日本の小さい駅前のバス発着待合室みたいな建物の中でぼやっと待つだけである。それでも2時30分頃飛行機は出発し3時40分スラバヤに着陸、昼食券を渡され食堂で焼き飯を食う。それからまてどもまてども飛行機は出ない。6時30分頃になってこの飛行機はこれでおしまいだ、明日6時30分出発するから5時30分にここにもう一度こいという。SorryともPardonともいわず、全く高姿勢である。こういう時のJALの平身低頭型と好対照である。ジャカルタではこの前にこりて空港で福岡さんが4時間も待っていて下さったそうである。申し訳のないことをした。今度はスラバヤの宿舎を知っているので車を拾おうとするとスラバヤから乗る積りだった中国人がブンガワンまでついでに送ってやるという。中国人はなかなか経済的に羽振りが良い。しかしまたドルを取り換えようなんてやられるので断ってタクシーにのる。バリでは車を持参したので無用であったが、デンパサーにはNiturとマークした信頼のおけるタクシーがあった。ジャカルタ、スラバヤにはこれがないので車の運転手と値段の駆引をする必要がある。普通100ルピア程度のところをこの時は160ルピアとふっかけられてしまった。突然の訪問にもかかわらず久保田所長は嫌な顔ひとつせず、手製のかつ井を振舞って下さる。久しぶりに故郷の味を噛みしめ日本製のブド

ウ酒で夜のふけるまで歓談する。ガルダさんはあてにならないのでジャカルタに行く他の方法を色々考えたが、道程は1,000km位あるので車は無理だし、汽車はまた汚くて混んで熱くて、とても日本人ののれる代物ではなく盗難が多くて便所にもいけないという話で結局飛ぶまで待とうということになる。

11

22日 久保田所長は私が乗り遅れぬよう、朝4時に起きて朝食を作って下さる。異国の地で日本人の親切は身にしみて嬉しい。

昨晚も勤務時間後に私がついたので、運転手に朝早く来て私を空港に送れという命令を伝えるため夜遅く徒歩で出かけられたようだ。私もガルダ時間に馴れてしまったので6時過ぎ空港に行く。万一のため自動車は飛行機のでるまで待機して下さる。しかし今日は珍しく定刻に飛行機が出る。ここは空軍と共用なので市民の待合室から飛行機までちょっとした距離をバスで行く。将軍が特別仕立の小型機でどこかへ行くのでその乗用車が飛行機につく間、我々のバスは飛行場の片隅で待機させられ、出発したのは6時55分、ジャカルタには9時につく。2日も一緒にいると乗客同志親しみが湧いてくる。東条英機に良く似たヘラルドトリビューンの特派員、乳飲み子を始め子供数人をかかえたジャワサラサを巻いた骨と皮ばかりの小母さんなど、今でも顔がありありと浮んでくる。

空港を出ると、例のポン引きたちが鴨が来たと思っについて離れない。今日で2度目ともなれば連中のその手は食わない。デンパサーのようにNiturというマークのついた信用のあるハイヤーがいれば良いのにジャカルタにはそれが無い。仕方がないので国際空港の2階の食堂に入っていく。お茶一杯で20ルピア位で我々にはこたえないがここに入れるような金持は少ないうらしくお客は誰もいない。ポン引氏は離れずついてくる。電話で日本工営ジャカルタ事務所に連絡し、むかえを頼む。電話のそばまで離れなかったポン引氏も日本語で連絡のついたらしいことが分りあきらめて出ていった。事務所で昼食を頂いた後千田氏とバンドンにむけ出発する。吉田所長の御好意で日本工営さんの車を先方に提供し、そのかわり日綿実業さんの高級車を運転手ごと借りて頂いた。福岡氏は我々がバンドンに行っている間に航空券の変更手続きをやって下さる

ことになる。ジャカルタからボゴールを通りバンドンまで時速 100 km の高速で突走る。なかなか運転技術は旨い様子だ。大体インドネシア人は器用といわれているが、土地感は鈍い。翌日の旅行でもバリの旅行でも我々は運転手の後から目を皿のようにして道路標識や建物をみて右とか左とか真直ぐとか怒鳴る必要がある。しかし今日は一本道で間違えることはない、ゆっくりと四方山の素晴らしい景色を眺めながら進む。東部ジャワ、バリのように荷物を頭にのっけ、サラサを腰に巻きつけた情景はこちらにはない。一応人々は欧米風のスタイルで、近代的な喫茶店などが峠の見晴らしの良いところに立っている。道路の途中で時々剣付き鉄砲の兵隊が立って居りストップさせられる。紙切れと粗末な旗を寄越して寄付をさせられる。金額は35ルピア位だが何か所も色々違う寄付があるのでかなわない。今日は土曜、日曜ではないので少ないとのことであるが、それでもバンドンに着くまでに3回やられた。その他兵隊達が車がないので自動車を止めて Hitchhiker をやるのが横行している。全く 1 km おき位に兵隊達が車をとめたような顔をして立っていたが、我々の車あまり立派すぎて気遅れしたのか、前の硝子につけた日の丸のせい一度もやられず無事通過した。途中の休憩も含め 5 時間位で高原都市バンドン市で一番立派といわれるホフマンホテルに達する。1 人部屋はないので 2 人部屋にとまる。我々がフロントから離れると受付係の 1 人が階段のところまでやって来てドルを公定よりも高く取り換えてやるという。俺達はルピアを持っているから結構という、日本から何か持ってきたか。買えるものはないかという。何もないと断ったら帰って行った。何か取り換えてやったら個室を世話してくれたのかも知れない。現在 1 ドル大体 100 ルピアが相場であるが、公定は確か 30 ルピア位で外国旅行者には 80 ルピアで取り換えてくれるという話もあるので、それ程無茶苦茶ではなくなったようである。このホテルは建物は立派だが例によって湯が出ない。冷房はないがここは高原都市で涼しくその必要はない。

テレビはないがラジオがついている。が英語放送は聞えなかった。ホテルの一品料理ではつまらないのでホテル裏の中華料理屋で持参のサントリーをハイボールにして飲む。靴磨き、ギター弾き、煙草売りが入れ替り立ち替りやってくる。女子学生が身分証明書の如きものを見せて寄付を集めにくる。

食事を済ませ外に出るともう 10 時で店はしまっているが街はジャカルタ、スラバヤにくらべずっと明るく商店のショーウィンドーの中も商品が豊富に見受けられた。ホフマンホテルの外側にも輪タクが沢山並んでおり、例の如く我々に誘いをかけるがあまりしつこくはない。

12

23日 バンドン工科大学と地質調査所に午前中に行く。この国は早朝勤務であるので 8 時から車で駆けずり廻る。工科大学の校庭の中では男子も女子もそれぞれ作業服をつけて軍人に軍事教練を受けている。

大学の入口は女の兵隊が立っている。写真を取らせてくれという一応ポーズをとってくれた。地球物理の Zen さんは研究室にいない。事務室の男の子に案内を頼むと喜んで車の助手席にのって案内してくれる。講義館、官舎、実家と廻るがどこにもいない。大学の官舎や実家はなかなか立派でハイカラである。残念ながら私の住居や昔住んだ官舎よりずっと立派である。とうとうあきらめて地質調査所にむかう。お目当のハックスルヨーさんは留守で次席のムルジョトさん、エチオピアから留学のバルボさんと火山、温泉、地すべりについて話し合う。写真 1 枚、紙 1 枚も不自由な様子で気の毒である。話の中で結論的なことになる主任のハックスルヨーさんに聞いてくれとか、他の部門とも関連があるので相談して返事をする



写真 7 女の兵隊

から、質問は文書にして出してくれという。研究の自由とはほど遠そうな感じを受ける。

バンドンの南1時間位のところにタングバンフラー山の火口がある。またそのそばに温泉がある。こちらへの道は何か軍事上の要地があるのか、それとも共産党員のバンドンへの出入を押えるためか寄付強制ではない本当の検問所が2カ所程あった。勿論日本人ということであさり通してくれたが、有難うというと彼等も黒い顔をほころばせる。対日感情は随分良さそうだ。

この山は今迄の測定で最高の自然放射能を示している。おかしいと思ったが、温泉も放射能が高い。カランカテスの宿舎を出てから湯につかったことはない。温泉にざんぷりとつかり汗を流したい欲望にかられたが、何分時間がない。無念の涙を飲んで引き返す。行きと逆のコースを取るがボゴールあたりで叩きつけるようなしゅう雨に会う。あたりは既に暗く車幅灯もつけず、ライトも半分しかないような車がすさまじい勢いで通り過ぎる。往年の帝国海軍軍人の眼のようにくらやみの中でもこの運転手はよくみえるのかも知れない。ジャカルタに近づきバイパスを通ると近いのだそうだが運転手は大廻りをする。バイパスではこの前兵隊同志の撃ち合いがあり数人死者が出たということで危険な道であるらしい。

予定より1時間以上も遅れたので吉田所長始め皆心配しておられた。日本航空の人もみえていた。明日からの航空券を持ってきて下さったのだが、これもまたやり直しになるのかもしれないと心配して帰れずにいたとのこと。お待ちかねなので水浴もせず、そのまま福岡夫人心づくしの日本料理とスコッチウイスキーで送別会をして頂く。これがインドネシア最後の夜かと思うと全く名残はつきず、楽しかったこと、つらかったことをしゃべり飲んでいるうちすっかり酔ってしまい、いつベッドに入ったのか終りは全く記憶にない。

13

24日 福岡氏に送られ日本航空にのる。気分は決して悪くはないが、昨日の酔がまだ全然さめない。スコッチは随分強いらしい。シンガポール、バンコックを過ぎ午後5時頃香港につく。この頃になり、やっと意識がまともになる。ジャカルタ空港で荷物を預けた覚えも受けで例の国境を越える手続きをした記憶もまるでない。荷物は無事着いているところをみると出国

のときも税関は簡単にOKしたに相違ないし、出国のときの外貨の申告も、ルピア持出しに関する検査も何もなかったに相違ない。国境の出入はずい分楽になったと思われる。ただガルダの中では何も買えない。入国のときに無税のウイスキーと煙草を買ってお土産にしようとしてあてがはずれ、私自身がアメリカ煙草を40~50ルピア出して闇で買わざるを得なかった。飛行機に乗る前に買われることをお奨めする。

14

とりとめもなく旅日記を綴ってみたがその他に書き足した方が良いかも知れぬと思うことを述べてみよう。先ず第一はマラリアの問題で、これはジャワ島中部に限定されているという話ではあるが、蚊がどこでも非常に多いので気持が悪い。特にバリ島では多かったように思う。タオルを取ると、その下から5、6匹ぶーんと飛び出してくる位である。最近良い特効薬があるというので私も飲んでおいたが蚊取線香は必需品である。

滞在が長くなるとどうしても理髪の問題が起ってくる。理髪店の前の円形階段型のしるしは万国共通かと思っていたがこの国ではなかったようだ。私の行ったところはマスクをしてやってくれ、そんなにくさくはなかったが、水道がないので、ボウフラのたまった水槽のへりをとんとんとたたいて、ボウフラが下に沈んだところで水をすくって石けんを溶かしひげをそってくれた。もちろん髪洗いはせずヘヤーカットとひげそりで10ルピアであった。娯楽のないせいか映画館の前はいつでも黒山の人だかりで、入口を狭くあけてそこから少し宛中にいれている。日本ものもわりときているが、日本語は現地語にふき換えられているという話である。中に入るとシラミ、ノミなどがうつるらしい。ホテル・インドネシアでは時々紳士淑女用の映画会を開いている。値段は100ルピア級なので値段からいっても庶民は入って来られないうえに、ネクタイ、上衣着用であるので背広を持っていない人は入れない。

治安の方は私がカランカテスに泊った夜、工事現場に強盗が入り、現地人の守衛が重傷を負ったことも日常茶飯事的に語られている位で、決して良いとはいえない。現在は兵隊になりさえすれば何とか食べていける道があるのでまだよいが、マレーシアとの平和条約ができて軍縮にでもなった後に予想される武器をもった失業者の大群に恐れをいだいている人が多かった。